平成23年度地球環境基金プロジェクト

マルチステークホルダーによる北陸における
ESD推進のための仕組みづくり

富山市立中央小学校による3年間のユネスコスクールの取り組み

平成24年3月

一般社団法人大学コンソーシアム石川

はじめに

「持続可能な開発のための教育の 10 年」が 2005 年 1 月から開始され、国や自治体、NGO 等を中心に、持続可能な開発のための教育（ESD）の推進活動が全国的に進められている。ESD の周知普及は、わが国の国内実施計画の中でも初期段階の重点事項として特に強調されており、平成 23 年 6 月の改訂に際しても引き続き重点事項とされている。

大学コンソーシアム石川では、平成 20 年度に地球環境基金の助成を得て、「学校教師を中心とした北陸地域の ESD の普及のための仕組みづくり」事業を実施し、関係者の協力と支援により、多大な成果をあげることができた。大学コンソーシアム石川は、さらに北陸地域における ESD の普及を促進するため、引き続き地球環境基金の助成を得て、平成 21 年度から「マルチステークホルダーによる北陸における ESD 普及のための仕組みづくり」事業を継続的に実施してきた。その成果もあり、平成 20 年 4 月には北陸では皆無であったユネスコスクールが平成 24 年 2 月には 52 校にまで増えている。

今後の課題としては、ユネスコスクールをはじめとする北陸の学校における ESD の質の維持・向上がますます重要になる。本報告書は、そのような観点から、北陸で初めてユネスコスクールとして認定された富山県富山市中央小学校における過去 3 年あまりにわたる取り組みとそこから得られた教訓とを整理し、取りまとめている。中央小学校が直面した課題は、多くの学校に共通するものである。そのため、それらの課題の解決に向けた取り組みは、今後ユネスコスクールとして ESD に取り組んでいこうとする北陸の、さらには全国の学校に対する示唆を提供するものと期待される。本報告書が、今後の北陸における、ひいては全国の学校の ESD 活動の推進に資することを願うものである。

大学コンソーシアム石川ＥＳＤ推進連絡協議会
鈴木　克徳（金沢大学教授）

富山市中央小学校による３年間のユネスコスクールの取り組み

はじめに

本校は、富山市の中心部に位置し、平成２０年４月、旧五番町、清水町、星井町の３校統合により開校した。

人工芝のグラウンド、オープンスペースの教室、２階には体育館、４階には、ガラス屋根開閉式プールがある。プールの床は昇降式で、プールを使用しない時には人工芝を敷き多目的スペースとして活用できるなど、様々な設備が整っている。

また、風力・太陽光発電・太陽熱温水器、ヒートポンプ方式を利用した暖房設備やビオトープから体育館に外気を取り入れるクールチューブを設置するなど最新の設備を備え、全校の子どもたちが給食の牛乳パックをリサイクルしたり、生活排水を有効活用したり、ビオトープの整備をしたりするなど環境を考えた活動を行うエコ・スクールである。

３校が統合されたことにより校区がとても広くなった。学校の東側には、いたち川が流れ、四季を通じて子どもたちが自然に親しめる環境にある。学校の南側には、寺院が数多く見られ、北側は古くからの商業地域で歴史と伝統を重んじる風土が根付き、地域の人々は郷土愛に満ちている。また、校区には、富山市科学博物館や富山県立近代美術館がある文京地域でもある。

少子高齢化や子育て世代の郊外移動等により、児童数減少傾向が続いたが、統合校の開校や市街地活性化の施策等により、今後の人口増に大きな期待が寄せられている。

このような環境のもと、本校では、「心身ともに健やかで、自ら学ぶ力を身につけた子どもの育成」を学校教育目標とし、合い言葉に「かしこく、やさしく、たくましく」として、知・徳・体のバランスのとれた子どもの育成を目指している。重点目標は、「学び合う楽しさが実感できる学校づくり」とし、分かる喜びや助け合う楽しさ、体を動かす楽しさなど、いろいろな楽しさを学校で実感できるように、「また明日学校に行きたいな」と思える学校づくりに取り組んでいる。その具体的な取り組みの一つとして、ＥＳＤを設定している。

学校としてＥＳＤを明確に位置づけ、豊かな体験活動や言語活動を通して、他との「かかわり」や「つながり」を大切にする子どもの育成を目指し授業実践を進めている。

中央小学校は平成２１年からＥＳＤに取り組み、本年度で３年目を終えるが、まだまだ課題は累積している。本稿は、３年間の成果と課題を年度ごとにまとめたものである。つたない研究ではあるが、ご一読いただければ幸いである。

Ⅰ　本校におけるＥＳＤ1年目〈平成２１年度〉の取り組み

初めに中央小学校の平成２０年度から平成２１年度にかけての取り組みを、１　ＥＳＤ実践に向けた取り組みのプロセス、２　ＥＳＤを通じて行われたカリキュラムの変革とその実践、３　成果と次年度に向けての課題について論ずることとする。

１　ＥＳＤ実践に向けた取り組みのプロセス

中央小学校におけるＥＳＤ実践に向けた取り組みのプロセスを５つに整理して紹介する。

⑴ＥＳＤを意識する前のカリキュラムの概要

本校では、各学年が年間指導計画を作成し、授業を展開している。

平成２０年度の年間指導計画は、清水町小学校、星井町五番町小学校の教務主任・学年主任が中心となり平成２０年３月（統合前年度）までに作成した。

作成に当たっては、それぞれの学校の地域性や今までの各校の実践を振り返り継続して活動していきたいこと、平成２０年度開校の中央小学校の学校行事等を考慮した。

平成２０年度の年間指導計画と具体的なカリキュラムの概要を例として以下に示す。

３年生の総合的な学習の時間には、広くなった中央小学校の校区を探検し、自分の調べたい場所や課題を見つけ、学んだことや自分の考えを生活の中に生かす力を身につけること、そして、自分のできることを見つけて行動することをねらいとしている。また、学習の終わりには、発見した校区のことをガイドマップにまとめ、家族や地域の方、他の学校の友達など伝えたい人に発信することもねらいとしている。

このように１年間を通して継続的に行う活動を見通し、４月には社会科の時間に学校のまわりを探検したり、１１月には学習発表会で発表の場を設けたりと総合的な学習の時間を柱に各教科、道徳、特別活動、学校行事と関連を図った年間指導計画となっている。

また、４年生の総合的な学習の時間には、校区を流れるいたち川の自然や歴史や文化などに五感を使って触れる活動を通して、いたち川の水や生き物に興味・関心をもつとともに、四季を通じて現場へ出かけ、水質調査を行ったり、川の周辺に住む方にインタビューしたりしながら地域の方々の地域に寄せる思いや願いを感じ取り、自分の課題を自分で解決することをねらいとしている。

そのため、社会科でごみ問題を考えたり、国語科の伝え合う単元を通して発表の練習を行ったりする学習と総合的な学習の時間との関連を図った年間指導計画となっている。

このように平成２０年度の開校時から、日々の教育活動の中でＥＳＤとは認識してはいないものの、すでにＥＳＤ的な活動の要素がたくさん含まれた年間指導計画を使って各学年の授業が展開されていた。

ポイント
・　年間指導計画は、ＥＳＤの要素がたくさん詰まったカリキュラムである。

平成２０年度　第３学年　年間指導計画

富山市立中央小学校

	４月	５月	６月	７月	時間	９月	１０月	１１月	１２月	時間	１月	２月	３月	時間	総時数
国語	つづけてみよう② きつつきの商売④ 漢字の音と訓④ 書写②	ありの行列③ 漢字の広場④ 国語辞典を使おう⑤ わたしと小鳥とすずと⑥ 書写③	分かりやすく書こう⑧ たしかな言葉③ 漢字の広場② 道あんない⑦ 三年とうげ⑥ 書写③	本は友だち⑨ 漢字の広場⑤ 書写②	94	キリン② へんとつくり④ 進んで話し合い発表しよう⑨ 書写③	反対の意味の言葉④ もいちゃんのかげおくり⑩ こそあど言葉③ 漢字の広場② 書写③	大事なことをたしかめよう⑨ カンジーはかせ④ 書写③	まとまりに分けて書こう⑩ 漢字の広場③ 書写③	94	名前をつけよう⑥ 漢字の意味② たから物をさがしに⑪ 書写③	漢字と友だち⑫ 漢字の広場⑥ 書写③	モチモチの木⑨ 書写②	65	253
社会	学校のまわり　⑪		市のようす　⑪		24	スーパーマーケットではたらく人　⑪		工場のしごと　⑪		28	火事がおきたら⑥	じこやじけんがおきたら⑥	安心してくらせるまちに④	18	70
算数	九九を見なおそう【かけ算】⑫ 時間のしくみを調べよう⑥	算数のひろば① 新しい計算を考えよう【わり算】⑩	水のかさをはかろう⑨	3けたの数の計算を考えよう⑭	61	長さをはかろう⑦ 種算② あまりのあるわり算⑩	四角形を調べよう⑨ 算数の広場② 大きい数のしくみ⑩	かけ算の筆算(1)⑭	ぼうグラフと表⑩	64	重さをはかろう⑧ 考える力をのばそう②	かけ算の筆算(2)⑩ 箱を作ろう⑤	そろばん③ 生活の中の算数② 3年のふくしゅう⑤	40	165
理科	しぜんたんけんをしよう③ 植物をそだてよう③	チョウを育てよう⑦	植物のからだをしらべよう④ こん虫をしらべよう⑩	わたしの研究②	25	花と実をしらべよう⑤ 日なたと日かげをくらべよう⑩	光を当てよう　⑩	明かりをつけよう　⑩		27	じしゃくにつけよう　⑪		つくってあそぼう　⑪	18	70
音楽	歌名になれよう　⑦ リコーダーに親しもう　⑧ いろいろな音のちがいをかんじとろう　⑦				22	ふしのとくちょうをかんじとろう⑨ 曲の気分をかんじとろう　⑨		物語と音楽②		22	音をきき合って合わせよう⑪ 生き生きと歌おう　⑪			16	60
図工	たしかめながら④	きせつの中で⑤	グルグルかくかく④ (ｺﾛｺﾛｺﾛｺﾛ ②)	風パワーぜんかい⑥	22	心キラリ⑤	絵本がいっぱい① ふわふわゴーゴー④	そのときの気もちを大切に⑥	みんなでつくろう！ゆめの町⑥	22	広がれ生きものワールド⑤	切って切ってトントントン⑥	ゆかいな木⑤	16	60
体育	おにごっこ・リレー　⑨ 保健「毎日の生活と健康」④ 鉄棒運動②	ウィンダキッカー⑤		水泳　⑩	40	リズムダンス④ 鉄棒運動①	走り幅跳び⑤ 輪遊び⑤	ティーボール⑤	なわとび⑤ ○○忍者参上！⑥	38	マット運動⑥ なわとび⑤	とび箱運動⑥ 力試し⑤	ボール遊び① タグラグビー⑤	22	100
家庭															
総合的な学習の時間	テーマ　「発見！発信！中央小探検隊」 ○私たちの町のお気に入りを紹介しよう(4) ○地域探検をして、マップを作ろう(12) 店コース　薬コース　自然コース　文化財コース　神社・寺コース 英語活動 あい・さつ②　数をかぞえよう③　○○は好きですか？④　ＡＬＴ 天気①　(１～２０まで)　(What do you like？)　③ 情報教育 インタビュー名人になろう①　名刺づくりに挑戦！① デジカメを活用しよう①				32	○　校区紹介をしよう(27) コース毎に調べてきたことをまとめる 学習発表会で伝えよう！ 中央小校区のよさを考え、伝えよう 何が好き？③　いますか？持っていますか？③　ＡＬＴ (色・食べ物・教科・スポーツ)　(家族・文房具・生き物)　④ Do you like～？　Do you have～？ キーボー島でローマ字に挑戦① 発信しよう～プレゼンテーション編～③				45	○　発信しよう！(17) ～中央小校区パンフレットを作ろう～ マップ作りを生かして広く発信しよう お世話になったガッに感謝の気持ちを伝えよう 知っていますか？③　○○先生の国のことを知ろう (名前・国)　(ALTの国について)③ Do you know～？　ＡＬＴ　② 見て！わたしたちのまちを ～パンフレット編～　③			28	105
道徳	わーい、春！ チューリップの花 千ばづる	生きたいぎ 心のシャッター わたしのしたこと ぞうくんのめがね	誠実に、すがすがしく 大切ないのち キツネおどり おロりんとぼく	日記大すき はた・らく	13	ないた赤おに 私にしかできないことがあるはずだ	花ざき山 おとうさんのくつ ぼくは太郎山	ぼくのたからもの いろいろな考えをもとに こんにちは「ゆずきょ」 しごとチェンジ	20世紀の大発明 ボロボロの心に 大きな木	13	ハワイの石うす 電話のおじぎ 木	ぼうや、生きていてくれよ 赤い灯ゆれろ 太郎のいどう教室	6年生をおくる会 けいちゃんのわすれもの なんでくん	9	35
特活	学級のめあて 係活動	自転車の乗り方 当番活動の見直し	雨の日の過ごし方 係活動の見直し	誠実に、すがすがしく 夏休みの過ごし方	17	そうじ名人になろう 係・当番活動	集会を開こう ニコ(ﾆｺﾆｺ)ﾀｲﾑ	社会見学の計画 係活動の見直し	クラス自慢 冬休みの過ごし方	16	宝物をふやそう 係・当番活動	お礼の心を伝えよう	さよなら会をしよう	12	45
	児童会活動　児童集会・町別児童会				5	児童集会・町別児童会				5	児童集会・町別児童会			5	15
行事	始業式　入学式 開校式　家庭訪問 入学を祝う会 身体測定	歩行会 運動会	4年集団宿泊学習	個別懇談会 終業式 6年立山登山 (一泊)	42	6年連合運動会 5年宿泊学習	学習発表会校内発表会	学習発表会	個別懇談会 終業式	21	始業式 書き初め大会 スキー学習		卒業を祝う会 卒業式 終業式 修了式	14	77
					397					395				263	1055

(2)校長・教頭を中心としたユネスコ・スクールへの申請（平成２０年４月～９月の活動）

平成２０年２月の日本ユネスコ国内委員会の「持続発展教育（ＥＳＤ）の普及促進のためのユネスコ・スクール活用について」の提言、同年４月の文部科学省の「ユネスコ・スクールの申請手続きについて」の通知を受け、「富山にユネスコ・スクールを」という意見が盛り上がった。

平成２０年４月には、富山ユネスコ協会が富山市教育委員会教育長、学校教育課長にユネスコ・スクールについての説明を行い、７月には富山市教育委員会が加盟の呼びかけを行った。

統合前の五番町、清水町、星井町小学校の３校では、募金活動やD-project、世界寺子屋運動などのユネスコ活動に積極的に参加し、それなりの成果を収めていた経緯があることや中央小学校がエコ・スクールであることを踏まえ、本校がユネスコ・スクールの候補校となった。

８月には、日本ユネスコ国内委員会委員の古田暉彦氏が来校され、校長に「ＥＳＤとユネスコ・スクール」についての説明があり、ユネスコ・スクールへの理解を深める研修がスタートする。

校長は、まず第一歩として“ＥＳＤ”という言葉やユネスコ・スクールがどのような学校であるかをきちんと理解しなければならないと判断した。そして、すでにユネスコ・スクールに加盟している学校ではどのような活動が行われているのか、本校ではどのようなことができそうなのかを洗い出す作業を進めた。その結果、本校の柱としては、「校区探検」「いたち川等地域の環境調査」「稲作体験」「世界寺子屋運動」など従来から行っている活動が該当すると考えた。

ユネスコスクール加盟に向けて

H20.	8.12	ユネスコスクール申請作業開始
	9.20	申請書作成にあたり富山市教育委員会に協力を依頼
	9.26	富山県教育委員会に推薦状を提出
	10. 1	富山県教育委員会に申請書を提出
	12.11	日本ユネスコ国内委員会申請
H21.	2.19	UNESCO 承認
	4. 9	日本ユネスコ国内委員会から通知

８月の中旬からは、教頭がすでにユネスコ・スクールに加盟している全国の小学校と連絡を取り、情報の収集に当たった。江東区立東雲小学校と交流が始まったのもこの頃からである。

校長や教頭などの管理職と教務主任を中心としたＥＳＤ校内推進委員の間では、ＥＳＤの考え方について理解を深めながら、ユネスコ・スクールの申請に向かって動き始めることになる。

ユネスコ・スクールの申請に向かう一方で、ＥＳＤ校内推進委員では、本校ができることとできないことをはっきりさせ、教師全員が共通理解を図るため研修の機会をもつ必要があると判断し、早速９月に専門家を招き、校内研修会を開く運びになった。

ポイント

ＥＳＤを推進していく上で、

- 本校で、ＥＳＤの活動としてどのようなことが行えそうなのか
- 教師全員がＥＳＤを理解するために欠かせないことは何かを考えることが大切である。

(3) 教師全員によるＥＳＤの認識の共有（平成２０年９月～１２月）

９月に初めて校内でＥＳＤについて学ぶ研修の機会が設けられた。この研修会の重要な目的は、ＥＳＤの考え方を校長・教頭などの一部のリーダーから教師全員へ広めることであった。

兼ねてから、校長は、専門家からＥＳＤの基本的な考え方や最近の動向について教師全員が研修しなければならないと考えていた。

そこで、日本ユネスコ国内委員会委員の古田暉彦氏にお願いし、「持続発展教育とユネスコ・スクール」と題して講演をしていただいた。

ＥＳＤに関する最初の研修会の成果は以下の通りと考える。

① 教師全員にＥＳＤの基本的な考え方が伝えられたこと

② 中央小学校がユネスコ・スクール加盟に向けて何を行うかを考えなければならないという認識が教師全員の間に共有されたこと

講演の話の中に出てくるユネスコ憲章の理念やユネスコ活動の取り組みは教師たちに抵抗なく受け入れられたが、“持続発展教育”や“ＥＳＤ”という言葉には違和感があった。

また、「中央小学校がユネスコ・スクールに加盟する」と言われても実感がわかない教師が多かった。また、現在ユネスコ・スクールとして様々な活動に取り組んでいる気仙沼市の小学校の事例を紹介していただいたが、「ＥＳＤとは何か理解できた」と納得のいくものではなかった。

第１回の講演を聞いてＥＳＤとは何か理解できた教師もいれば、そうでない教師もいた。認識の共有時によく聞かれた「これもＥＳＤになる？」という会話からもＥＳＤへの理解が十分できていないことが伺えた。専門的な話を聞いて何となく言葉で分かったつもりでも目の前の子どもの姿を考えたときに、どういう活動や体験を仕組むことがＥＳＤにつながるのか、ＥＳＤを行うことで子どもにとってよいことは何かなど、“ＥＳＤ”とは何かがはっきりしないことが現実問題であり、教師全員を対象とした研修の機会が再び必要であることをそれぞれの教師が感じていた。

そこで、１１月に第２回目の研修会を行い、金沢大学教授　鈴木克徳先生から「ＥＳＤとは」と題して講演をしていただいた。

鈴木教授からの新たな知見には、以下のことが含まれていた。

- ＥＳＤは、環境教育ではない。
  また、生活科や総合的な学習の時間だけに行われるものでもない。
- ＥＳＤ実践は、教育そのものに求められる活動と大きく重なる部分がある。

２回目の研修会では、新しい取り組みとして、各学年主任が本年の４月から１１月までの実践を紹介し、鈴木教授から感想をいただいた。

平成２０年度の開校以来、各学年の実践内容を教師全員で共有し合う機会は初めてであり、この研修会で行った実践発表は、教師全員にとっても大変よい情報交換の場となった。

鈴木教授からは、「中央小学校で今行われている各学年の活動すべてがＥＳＤとみなされる」という評価をいただいた。この言葉は、今までＥＳＤとは何かその具体的な答えを

〈９月・１１月の校内研修会〉

＜9月の講演内容＞　　講師　古田暉彦氏
・持続可能な開発とは
・ＥＳＤの経緯
・ＥＳＤの目標
・ＥＳＤの基本的な考え方とＥＳＤで育みたい力
・学習指導要領におけるＥＳＤの取り扱い
・ＥＳＤとユネス・コスクール
・気仙沼市立面瀬小学校や江東区立東雲小学校の事例紹介

＜１１月の講演内容＞　　講師　鈴木克徳先生
・なぜ、今環境問題やＥＳＤについて考える必要があるのか
・地球は持続不可能であるという現状の認識
・世界や日本の動向
・ユネスコ・スクール推進に向けた文部科学省の取り組み
・北陸におけるＥＳＤ普及のための取り組み
・学校におけるＥＳＤ推進上の課題と可能性

＜１１月の研修会で発表した各学年の取り組み＞
１年　花を育てよう　外に行こうよ　生き物を見よう　秋を楽しく　他
２年　野菜を育てよう　ザリガニを育てよう　わたしのまち大好き　他
３年　発見！ 発信！ 中央小探検隊　他
４年　レッツゴーいたち川探検隊　科学博物館利用学習　他
５年　農業体験学習　ヒートポンプ学習　ビオガーデンづくり　他
６年　中央小おすすめガイドブック　児童会Ｄプロジェクトの推進　他

＜講師の先生方からの助言＞
・　町の中である地域性を考えると、簡単には学校外に学習の場を求めるのは難しい。しかし、地域のバックアップ体制を整えていくことで学習の場は保証される。
・　中央小学校の校区には歴史的な文化財が多く、商店街の人々との触れ合いを感じられる特性がある。
　ＥＳＤの出発点は地域にある。地域に愛着をもつ取り組みはすばらしい。
・　いたち川などの自然の中で体験することにより、子どもたちは様々なことに興味・関心を示すものである。その中にＥＳＤのベースとなっているものが必ずあるはずである。

探していた教師にとってとてもすっきりした言葉であった。

また、ＥＳＤの推進に向かっていた校長をはじめとするＥＳＤ校内推進委員にとっても「本校では何ができそうか、どんなことがＥＳＤの活動として行えそうなのか、子どもにどんな力がつくのか」その答えが明確になった瞬間でもあった。

この研修会を通して見えてきたことは、本校では新たに何ができそうかではなく、「今行っている多くの活動の中にＥＳＤの視点をどう位置づけていくか」であった。

この段階で鈴木教授から様々なアドバイスやＥＳＤに向けての方策を示唆していただいたことは、今後実践していく教師全員にとても参考になった。

１１月の研修会は、講演を聴くばかりの一方通行ではなく、双方向の研修会であったことが大きな成果を上げる要因につながったと考える。

教師のほとんどがＥＳＤとは本校の活動にあてはめると具体的にどの活動を指すかが分からなかった点を解決する上で、教務主任が設定した研修会の持ち方は有効にはたらいた。

教師がＥＳＤは特別な教育ではなく、日々の教育活動の中にＥＳＤの要素がたくさんあることに気づくことは、これからＥＳＤを推進していく学校にとっても大切なことである。

このような教師全員によるＥＳＤ理解のための研修が進む一方で、校長を中心とするＥＳＤ校内推進委員もＥＳＤ理解に積極的に努めた。

１０月の末から大学コンソーシアム石川で「石川ＥＳＤ講座」が５回にわたって行われることを知り、ＥＳＤ校内推進委員のメンバーがこの講座に参加した。特に第２回の講座では、校長がエコ・スクールとしての施設の素晴らしさや学習発表会で３年生が地域へ発信した中央小学校の実践を自ら紹介し、「これからはＥＳＤが大事である」との思いを強くした。

ＥＳＤ校内推進委員のメンバーは、様々な研修会を通して、ユネスコ・スクールになることは、専門機関との連携を図ることもでき、子どもたちにとっても教師にとってもよいことにつながると判断するようになってきた。

１２月には、教頭が国連大学で開催された「ＥＳＤ国際フォーラム２００８」に出席し、ＥＳＤの普及・推進に向けて世界や日本の最新の動向を学んだ。その際に、江東区立東雲小学校の手島校長からＥＳＤカレンダーを紹介された。

早速、この話題を持ち帰り、教務主任と相談した結果、本校でも東雲小学校のＥＳＤカレンダーを参考にして、各教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間の中にあるＥＳＤの考え方を整理し、教科のつながりや系統を考え、本校独自のＥＳＤカレンダーを作成することに着手した。

ポイント

・　ＥＳＤは、新しい教育でも特別な教育でもない。日々の教育活動の中にはＥＳＤの要素がたくさんある。まずは、教師全員がここに気づくことが大切である。

⑷ ＥＳＤの観点を踏まえた学習指導計画の見直し（平成２０年１２月～平成２１年３月）

先の「１　ＥＳＤ実践に向けた取り組みのプロセス、⑴　ＥＳＤを意識する前のカリキュラムの概要」で述べたように、本校では各学年が年間指導計画を作成し、日々の授業を展開している。

ＥＳＤカレンダーの作成は、ゼロからの出発でなく、現在使用している平成２０年度の年間指導計画を利用して行った。

まず、ＥＳＤカレンダー作成にあたり教師間で共通理解が図られ、ＥＳＤカレンダー中央バージョンとしてＥＳＤのテーマを３つ設定し、各教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間の中からＥＳＤの考え方が生かされるものをｐｉｃｋ　ｕｐする作業を進めた。

平成２０年１２月から平成２１年３月にかけてのＥＳＤカレンダー作成作業から見えてきたことは、「教科のここにＥＳＤの視点があった」、「年間指導計画の中のここにＥＳＤの視点を加えられそうだ」など、学年における特徴がはっきりしてきたことである。

ただ、この段階では、まずはＥＳＤカレンダーを作ってみるという作業を優先したので、多くは教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間の内容面での関連であり、子どもたちにつけたい力まで教師の意識は向いていなかった。

しかし、平成２１年度からＥＳＤカレンダーを使って学習指導のスタートをきる上で、まずは関連するものをつなぐところから始めるという作業は妥当であった。年間指導計画を見て、教科のたてとよこのつながりを考えるだけでも、教師にとっては、ＥＳＤを実践していく上で意識の再構築になった。

ＥＳＤカレンダーの作成と並行して、本校では、平成２０年度の研究の成果として研究紀要を作成した。研究紀要の中には、個人研究の分野と学年主任がまとめたＥＳＤの視点で見た各学年の取り組みの２点を載せた。

ＥＳＤの視点でまとめた６年生の事例を紹介する。

平成２０年度に６年生が行った世界寺子屋運動は、世界の現状を知ることから始まり、「募金箱やリーフレットの作成」を表現活動として行い、学習の最後には、全校、地域を対象に「書き損じハガキの回収の呼びかけ」という行動を起こす力を育むことができた。

国際理解をテーマに学習を進め、本やインターネットによる知識理解だけにとどまらず、日本ユネスコ協会連盟の方をお招きして世界の実情を聞くことで、子どもたちは今の自分にできることは何かを真剣に考えることができた。その真剣な学びが、書き損じハガキを集めてカンボジアに寺子屋を建てたいという具体的な行動として現れた取り組みであった。

６年生と同様に各学年でも１年間の取り組みを振り返り、教師がもった思いや願い、活動の成果をＥＳＤの視点でまとめた。

平成２０年度においては、ＥＳＤ校内推進委員を含めた教師全員が各学年の取り組みを共有できる手段がこの研究紀要であったと考えられる。

一方、３月にはＥＳＤ校内推進委員で、平成２１年度の教育計画案やＥＳＤの推進に向けて学校全体としての取り組みの体制作りが進められた。

ESD（持続発展教育）カレンダー　第５学年

富山市立中央小学校

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
国語	お願いの手紙、お礼の手紙、敬語）	サクラソウとトラマルハナバチ	千年の釘にいどむ		人と「もの」とのつき合い方	ニュース作りの現場から	情報と社会	わらぐつの中の神様		言葉や表現のちがいから	大造じいさんとガン
社会	・食料のふるさと調べ ・米作りのさかんな庄内平野		水産業のさかんな枕崎市	これからの食料生産とわたしたち 食料生産の自給	自動車をつくる工業 人と共存する車	工業生産と貿易	わたしたちの生活と情報		きまざまな自然とくらし	わたしたちの生活と環境	
算数									百分率とグラフ		
理科	天気と気温の変化	植物の発芽と成長	生命のたんじょう（魚）		花から実へ	台風と天気の変化	流れる水のはたらき	生命のたんじょう（人）			
総合的な学習の時間	テーマ　「食の向こうに見える世界」 人と環境にやさしい米作り　農業体験学習 個人情報について デジタルカメラやビデオの操作			わたしたちと世界とのつながり ～食をみつめて～		農業体験をまとめ、 ニュース番組をつくろう	中央っ子フェスティバルで伝えよう 感謝の集いを開こう		日本の食の未来を考えよう 伝えよう！わたしたちのおこめ白書		
外国語活動	英語活動 いりろな仕事の言葉 挨拶・時間・一日の生活				いろいろな季節の言葉 ・体調・ものの様子・天候季節・月や 季節の行事				家族の紹介 案内・復習		
道徳	氷上の挑戦 一枚の写真から	すてきなおくりもの	「スイミー作戦」 「ガンジー作戦」	チャイさんのマンゴー いっしょに何をしようかな	土は命のお母さん	家族の紹介	やってよいこと、しなければならないこと	わたしたちの町って	死の船を救った愛のリレー	ガンジーのいかり	アンデルセンの夢
特活	高学年として				宿泊学習の計画を立てよう		自分の仕事を見直そう 大人に近づくわたしたち		給食に感謝しよう		卒業を祝おう
音楽			アジアの音楽に親しもう							日本の音楽を味わおう	
図工					こんなとき　感じること思うこと						
体育								けがの防止			心の健康
家庭						作っておいしく食べよう				家族とのふれあいを楽しもう	
備考											

まず、平成２１年度の教育計画の中にＥＳＤを推進していく上で次のことがしっかりと明記されることが決まった。

・　地域や自然、人とのかかわりや豊かな体験を重視し、各学年が特色ある活動を展開する。

・　平成２１年度は、学校教育目標を核としたＥＳＤ全体計画を作成し、ＥＳＤを推進する。

また、平成２１年度には、本校がＥＳＤを推進していくにあたり、教務主任とは別に、ＥＳＤの研修の担当に「ＥＳＤ総括」という役職を新たに置くことが決まった。

＜ＥＳＤ総括の役割＞
・　ＥＳＤに関する校内研修会の開催
・　ＥＳＤカレンダー見直し作業、取りまとめ
・　各学年間をつなぐコーディネーター
・　地域や他の連携機関との連絡調整

このようにＥＳＤ導入までのプロセスは、学校の管理職を中心としたユネスコ・スクールへの申請（平成２０年４月～９月）の時期を第一段階、教師全員によるＥＳＤの認識の共有（平成２０年９月～１２月）の時期を第二段階、ＥＳＤの観点を踏まえた学習指導計画の見直し（平成２０年１２月～平成２１年３月）の時期を第三段階に分けることができる。

ポイント
・　ＥＳＤカレンダー作成は、現在使用している年間指導計画をベースにすればゼロからの出発ではない。
・　ＥＳＤカレンダーを作る過程で、教師の頭の中が整理される。
・　ＥＳＤカレンダーは、教科・領域を超えた学びの設計図である。
・　教育計画作成等、ＥＳＤを推進していく上での体制づくりはＥＳＤ校内推進委員の大切な役割である。

(5) 学習指導計画の更なる見直しと新計画の試行的な実践（平成２１年４月～７月）

ＥＳＤカレンダーの完成、学校全体としての体制づくりが確立され、平成２１年度がスタートとすることになる。

ここからは、新年度の学年編制時における更なる見直しと１学期の実践について述べる。

小学校では、新年度になると教師は前年度とは別の学年を担任することがほとんどである。また、前年度本校に在籍した教師が別の学校へ異動することもある。中央小学校も例外ではなく、４月の研修会では、新担任による年間指導計画とＥＳＤカレンダーの見直し作業に取りかかった。

見直しのポイントは以下の通りである。

・　学年主任を中心に学年内の調整を図る。
・　単元の目標や体験活動とのすり合わせを行う。
・　教師が子どもたちにどんな力をつけたいか願いをもつ。

このように新担任による年間指導計画とＥＳＤカレンダーの見直し作業を経て、４月から行われた５年生の実践を紹介する。

５年生のＥＳＤカレンダー見直し作業の前後を比較して大きく異なるところは、総合的な学習の時間の単元構想である。

平成２０年度は、ビオトープの整備から環境について考えることがテーマであったが、平成２１年度は、「食の向こうに見える世界」と題し、農業体験活動を通して「食（しょく）」について考えることをテーマに設定した。

担任は、「自分の食生活調査」「稲作体験活動」などの活動の重点化、社会科の学習「わが国の食料自給率と食料輸入」との関連を図り、生産者と消費者という２つの視点を関連させ、より焦点化して学習を進めていくことを考え単元構想の見直しを図った。

そのため、ＥＳＤカレンダーの中に総合的な学習の時間の学習を中心に据え、各教科・道徳・特別活動とたてのつながりの違いが明確に表れている。

また、単元構想の中に新たな体験活動が盛り込まれた。

中央小学校の限られた敷地を利用し、工夫一つで子どもたちに豊かな体験活動を味わわせることができると考え「セントラル水田」を体験の場として活用したことである。担任は、「セントラル水田」を通して繰り広げられる様々な体験が子どもたちに生きてはたらく力となると考えた。

４月からは見直した年間指導計画とＥＳＤカレンダーをもとに学習が展開された。

子どもたちは、自分の食生活調査活動を行ったり、社会科「わが国の食料自給率と食料輸入」で、食料問題について考えたりしながら学習を進め、自分の課題を解明しようと追究活動を行った。

７月には、今まで取り組んできた稲作活動を振り返り、分かったことや感じたことを紹介し合うことで、これからの稲作活動への意欲をいっそう高め、夏休みの取り組みに対する目当てをもとうと話し合い活動が行われた。

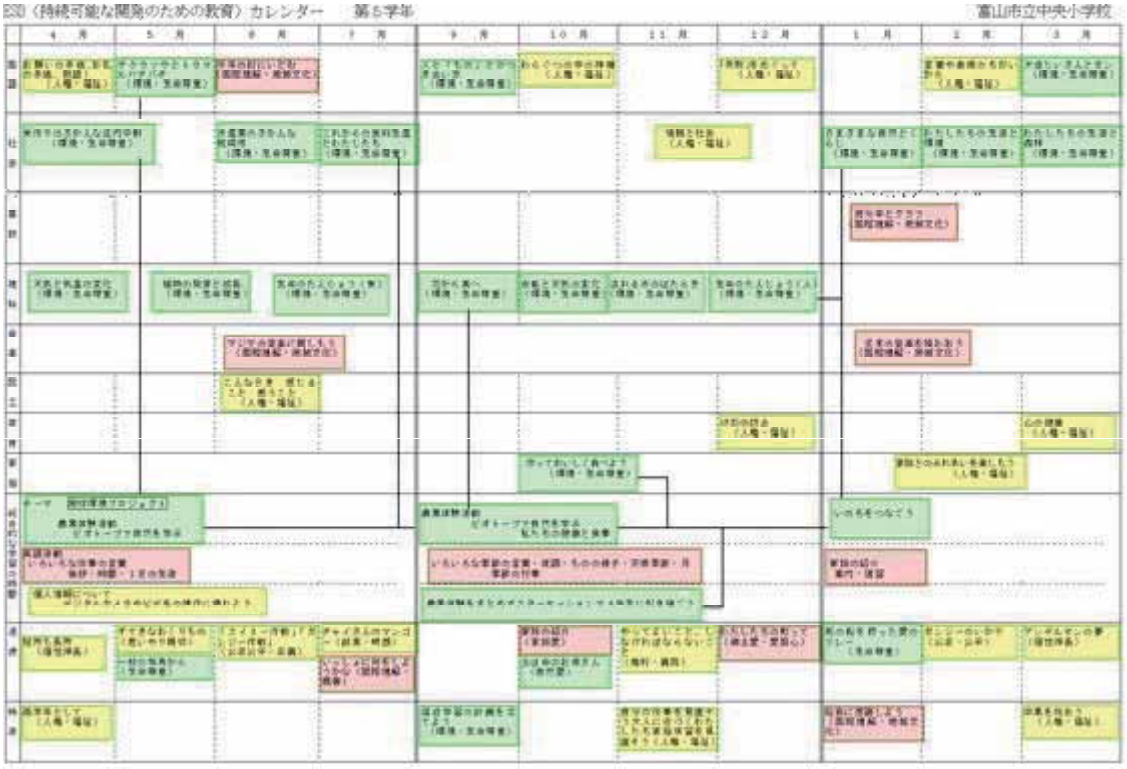
この話し合い活動を通して子どもたちは、「セントラル水田の大きくなった稲からたくさんの米がとれるように、これからも自分たちの手で無農薬の稲を大切に世話していきたい」と強く願いをもつことができた。

子どもたちは、ビオトープに自分たちの手で作った「セントラル水田」において環境にやさしい米作りを願って行う体験と、有機栽培農家へ出かけ、田植えや草取りなどの本物の体験を並行して行うことで、生産者・消費者の両方の立場から「食」について考えることができた。

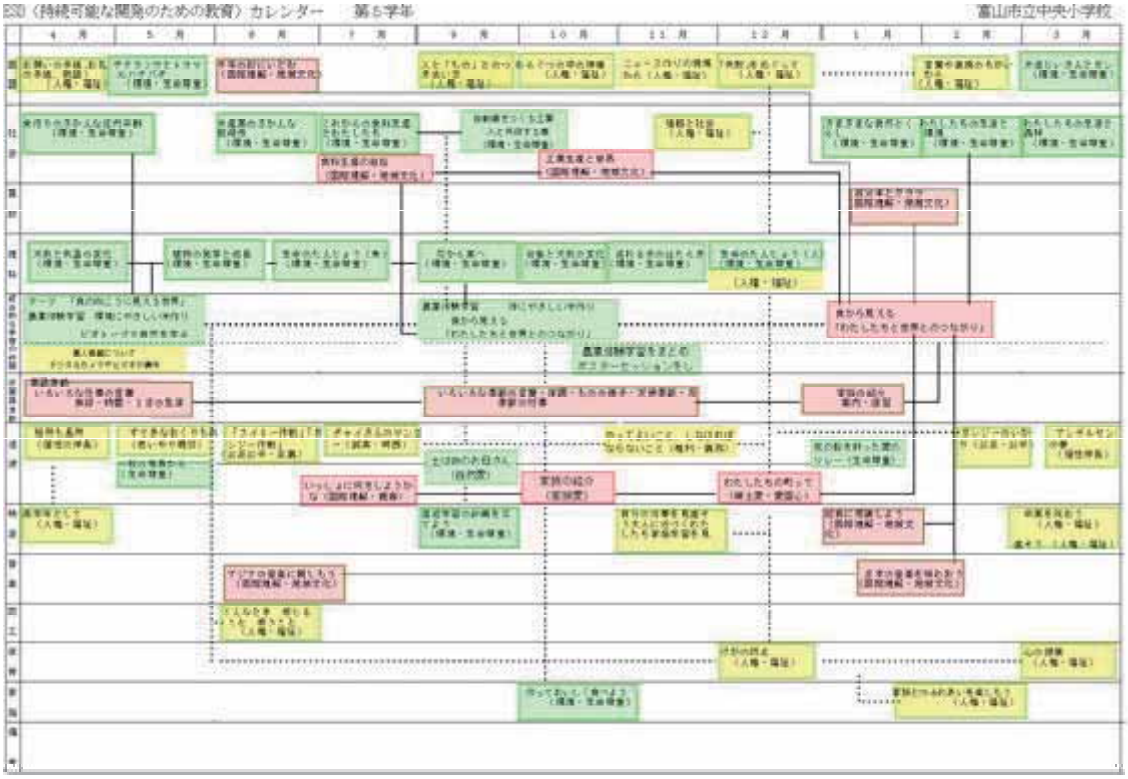
ポイント

・　４月には、新担任が年間指導計画とＥＳＤカレンダーの見直しを行い、見通しをもって活動を進める。

＜３月に旧学年の担任が作成したＥＳＤカレンダー＞



＜４月に新学年の担任が作成したＥＳＤカレンダー＞



２　ＥＳＤの視点から行われた学習指導計画の見直しの内容

⑴ＥＳＤカレンダーを用いて既存の学習指導計画を見直していったプロセス

１学期の各学年の実践が進むにつれ、ＥＳＤカレンダーの課題と更に改善すべき点が少しずつ見えてくる。ＥＳＤ総括は、４月～７月までの各学年の実践を振り返り、「うまくいっている点」「予定通りいかなかった点」について夏季休業中に見直すことを提案した。見直すポイントをもとに各学年では、学年主任を中心に更なる見直しを図った。

１年生は、「がっこうたんけん　－　みつけたよ、ぼく・わたしのおきにいり－」の活動を通して、自分たちの身近な社会である学校の施設や人に繰り返しかかわる中で、学校生活を送る楽しさを味わった。子どもたちは、最初に学校職員にあいさつや質問をしたり、握手を交わしたりする握手大作戦で話し方の練習を行い、次に、「みんなとたんけん」「グループでたんけん」「一人でたんけん」と様々な人とのかかわり方を少しずつレベルアップすることで、コミュニケーションの抵抗感をなくし、自分の思いをもって活動するようになっていった。これらの１学期の経験から培った力（スキル）を生かし、担任は、幼稚園児や保育園児を学校に招待し、中央小学校の学校紹介を行う活動を仕組んだ。

２年生は、「ともに生きる」をテーマに、人や生き物とじっくりふれあいながら、命を大切にする学習を進めている。

学校を飛び出し、富山市ファミリーパーク（動物園）の事業と連携し、農業体験をしたり、どろんこになって季節を体感したりしながらダイナミックな活動を展開している。

子どもたちが体験を通して感じたことを話し合ったり、記録に自分の思いを書かせたりしながら体験を積み上げ、活動の連続性を図っている。

１学期の実践から見えてきたことは、ＥＳＤを行う上で必要なスキル（聴く力・話す力・伝え合う力）を学習のどの場面で子どもたちに身につけていくかを考えることである。

担任は、２年生の発達段階でこれらのスキルを子どもたちに身につけさせるには国語科との関連が大切であると考えた。

１０月には国語科の説明文「サンゴの海の生きものたち」の実践を行った。

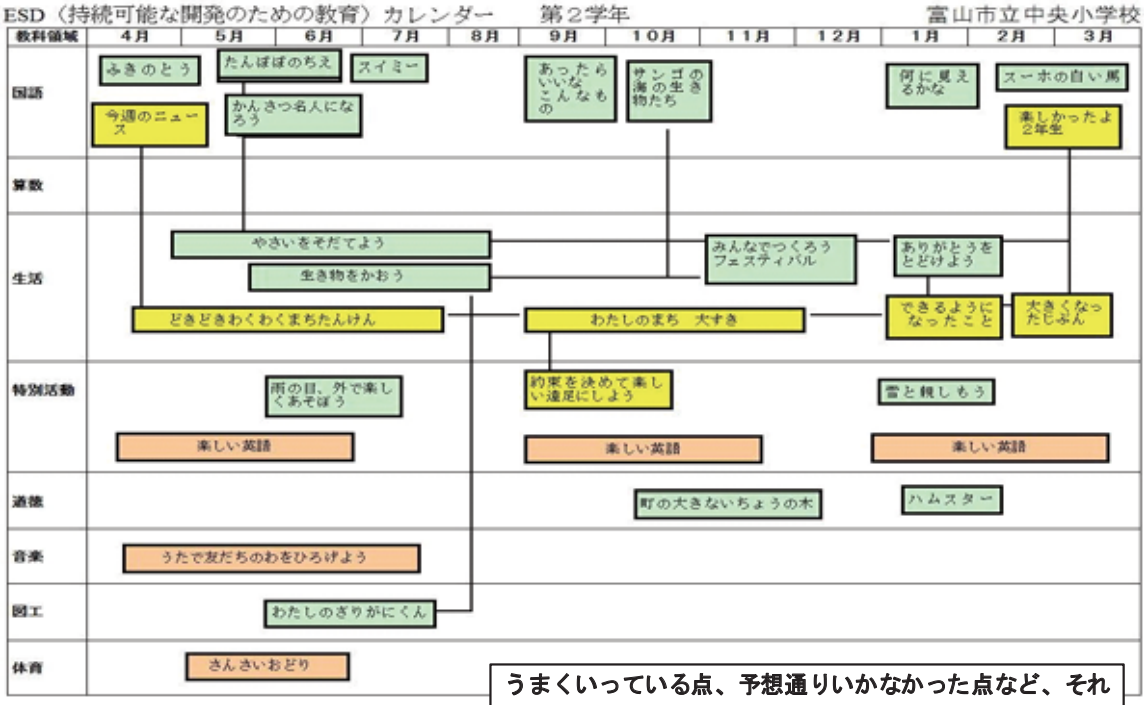
担任は、この教材を「共生」という視点からＥＳＤとしてとらえ、サンゴの海に暮らす生き物たちが共生していることを知らせる説明文を通して、大事なことを落とさず読む力を付けるとともに、人はたくさんの生き物と共に生きていることを学ぶことをねらいとした。これらの学習を通して、子どもたちは、科学読み物とのかかわりを深めていき、生き物図鑑を作って海の中には、たくさんの生き物が仲よく暮らしていることを全校に伝える活動にまで発展させることができた。

ポイント

・　ＥＳＤ総括を中心に、ＥＳＤカレンダーの見直しを図りながら手直しを加えていくことが授業を実践していく上で大切である。

○２年生の学年主任がＥＳＤ総括に提出した資料

１学期の取り組みを振り返って　　第２学年



うまくいっている点、予想通りいかなかった点など、それぞれの観点から振り返り、２学期の実践につなげましょう。

＜教科との関連から＞

・国語科との関連が大切である。

「たんぽぽのちえ」→科学的知識を得る
　　→身近な自然に目を向けるようになった
「かんさつ名人になろう」→かんさつ文の書き方を知る
　　→野菜栽培の観察も継続中
「今週のニュース」→スピーチの仕方とスピーチ内容の見つけ方を知る
　　→日々の栽培活動や花見などの行事をまとめ話せるようになった

・道徳において子どもの変化が見られた→自然愛護などの心情を経験とも交えて熱く語る子どもが増えつつある

＜生活科の取り組みから＞

・ぼくわたしの野菜を育てよう
　ファミリーパークでの農業体験
　ザリガニ・カブトムシを飼おう
・町たんけん　・・・　５年生とのお花見

この３本を同時進行し、日々生命と向き合う刺激的な日々となった。子どもたちの追究意欲は衰えることなく２学期が楽しみである。木曽馬との旧式の田おこし、苗や生き物の死との直面、害虫やカラスとの戦いなど貴重な体験が満載だった
野菜の入手や植え付け、農業体験に至るまで、保護者（祖父母も野菜名人として）に参加していただいたところ、大変積極的で、親の認識が変わったと思う。

＜外部（専門）機関との連携から＞

・県総合運動公園管理課→野菜の栽培土作りの際、腐葉土を頂いた。その腐葉土と学校の土を混ぜて子どもたちの手で土を作った
・富山市ファミリーパーク→２回の農業体験に大変協力してくださった。生き物の観察や「わくわく田んぼ」での泥んこ体験は、専門員の方々が一緒に活動して説明してくださった

＜２学期の取り組みと修正 or 次年度への提言＞

・町たんけんを大切に実施します
・野・農・飼　もちろん継続します　←　ファミリーパークとの連携が子どもたちをたくましくします
　（９月の芋掘りでは、収穫した芋を木曽馬など動物のえさとして与えます）
・国語科で説明文の正しい読み方を学ばせ、「海の生き物図鑑」を作成します

⑵ 学年内における教科間のつながりと学年間の連絡・調整

３年生では、総合的な学習の時間と社会科との関連を密に図り学習を展開した。

「発見！発信！中央小探検隊」では、地域の特性を生かして自ら課題を見つけ解決していく主体的な力を培うとともに、自分や他者のよさを発見し、これからの自分の生き方を考えることのできる子どもを育成することをねらいとしていた。

子どもたちは学習が進むにつれ、人との触れ合いで多くのことを学び、校区の特色や校区の人々のよさを発見し、校区のすばらしさを感じ取っていった。

何度も地域へ足を運び、体験的な活動の充実を図ることで、子どもたちの学びたいという意欲が高まり、地域への見方や考え方の深まりが見られた。

一方で２学期のショート単元として行った「世界わくわく大発見」では、社会科のスーパーマーケットの見学から世界を見つめ、「食」を通して他の国の人や文化に触れ、外国や外国人への興味・関心を高めることをねらいとした。

担任は、夏季休業中のＥＳＤカレンダー見直し作業の際、９月からの実践に向け、各教科や道徳、特別活動と関連をさらに図ることにより、子どもたちの国際理解に対する考えが深まると考え、以下の学習や活動を加えた。

① 道徳の時間に副読本を活用し、日本のよさを発見する学習

② 総合的な学習の時間にＡＬＴと英語で　あいさつの仕方を学んだり、果物の名前を英語で言いながらゲームをしたりして異文化理解に努める活動

また、外部関係機関と連携し、子どもたちが外国の人と実際に交流する活動を行うことでコミュニケーション能力の育成を図ることもねらいとした。 一方、スキルの面では、国語科の学習で相手を考えて分かりやすく話す力を養うことを確認した。

１０月に行った実践「日本の食文化を紹介し外国の人と交流しよう」の学習では、外国に対する興味や関心をもって食べ物や身の回りのものを調べ、外国とのつながりの深さに目を向けていく子どもの姿が見られた。また、子ども同士で日本の食文化を紹介し合ったり、実際に外国の人と交流して外国の食文化について積極的に質問したりする姿も見られた。

これらからも分かるように、ＥＳＤカレンダーを見直し、双方向から子どもたちにアプローチをしかけたことにより、子どもたちは世界の国々に興味を深め、もっと詳しく調べてみたいと個々の学びが深まったと考えられる。

学年主任を中心として学年内でＥＳＤの視点で教科間のつながりを見直すことの効果は、授業実践を通して見えてきた子どもの姿からもよく分かる。

一方では、学校全体でＥＳＤを推進していくに当たり各学年間の連絡・調整も不可欠であると考える。

例えば、２年生の生活科で取り扱う「町たんけん」の学習と３年生の総合的な学習の時間で行う「発見！発信！中央小探検隊」において、学習内容や教師のねらいの重複を避けなければならない。また、３年生の子どもたちが総合的な学習の時間で抱いた地域や世界の国々への興味・関心は、４年、５年、６年と学年が進むにつれ、世界に目を向ける視野の広さを養い、体験を通して日本と世界とのかかわりを身近にし、世界に向けて行動を起こす力につながっていくと考える。

それぞれの学年の学習や体験が独立して行われるのではなく、学年を跨いだカリキュラムを作成し、その調整役をコーディネーターとしてＥＳＤ総括が果たすことが大切となる。

しかしながら、平成２１年度は、この学年間の連絡・調整をうまく図ることができなかった。

考えられる要因は、以下の通りである。

① 一部の学年とＥＳＤ総括の間だけの情報交換に終わっていること

② 各学年の取り組みを全体で共有する時間がなかなか確保できなかったこと

これらは、平成２２年度のＥＳＤ推進に向けての課題である。

ポイント

ＥＳＤの視点で行うことの効果は、

① 各教科で学んだことが意思としてつながり理解が深まることで、子どもたちに学ぶ意欲がわく。

② 学習した内容を活用する実践力が子どもたちに育つ 。

これらは、ＥＳＤ実践の効果でもあり、学校としてこんな子どもを育てたいという目標でもある。

⑶様々な関係者との連携・協力

すべての学年において様々な機関との協力・連携が見られた。

各学年が追究活動の過程で外部機関との連携を図ることにより、専門的な知識を得ることで、子どもの考えが深まるという効果が見えてきた。

子どもたちは、本やインターネットで調べるばかりではなく、専門的な話を聞くことで自分の考えが深まり追究活動を進める。

ＥＳＤの視点が活動の中に加わることにより、子どもたちの活動は、その子どもの人生に大きな意味をもつ体験へと変わる。

６年生では、「世界の１２歳調査隊～世界の子どもたちは今！～」の学習と通して自分自身の生活を見つめ直し、未来に向けてどう生きていくかと自分の「生き方」を考えることをねらいとしている。

子どもたちは追究活動の過程で、日本ユネスコ協会連盟やＪＩＣＡの方々から直接世界の現状を聞いた。自分たちと同年代の世界の子どもたちの様子や生き方、生活の環境について知ることは、６年生の子どもたちにとって興味のある課題であった。自分たちの生活と世界の子どもたちの生活を比較することで、学びの中に「自分たちは何をしていかなければならないのか」「自分たちにできることは何か」という考えが生まれ、「やってみよう」という実践へと気持ちが高まっていった。

そこから生まれたボランティア活動の「書き損じハガキを集めたい」という実践は、子どもたちにやり遂げた充実感を味わわせることにつながっていった。

様々な関係者と連携を図るときに大切なことは、子どもたちに学習のこの場面で何を考えてほしいか、何を学んでほしいか、教師の意図をしっかり関係者に伝えることである。

子どもたちに何を気づかせ、どんな活動へと発展させたいかを教師がきちんと関係者に伝え、教師と関係者がそれに対する迫り方を共通理解して学習に臨むことが大切である。

あくまでも現場の教師が学習を展開する上で、イニシアチブを発揮することを忘れてはならない。

ポイント
- 外部関係機関と協力・連携を図ることにより、子どもたちは、専門的な知識を得ることができ、個々の考えが深まる効果がある。
- 教師は、子どもに考えてほしいこと、学んでほしいことを関係者に伝え、どのような視点で話をしてもらうか打ち合わせを綿密に行うことが大切である。

3　成果と次年度（平成２２年度）に向けての課題

⑴ＥＳＤ推進の中心となるＥＳＤ総括の制度としての確立と周知

平成２１年度では、先進校の実践の紹介、ＥＳＤカレンダーの見直し作業やとりまとめなど、ＥＳＤ総括の果たした役割は大きい。

平成２１年度にＥＳＤ総括が果たした役割を以下に整理する。

①　ＥＳＤの視点を取り入れた指導計画を基にした実践を示し、ＥＳＤ要請訪問で校内研究授業を提案したこと。

②　夏季休業中にＥＳＤカレンダーの見直しを呼びかけ、改善点が各学年の２学期の実践に生かされたこと。

③　気仙沼市の小学校を視察するなど、全国で実践されている様々な事例を校内研修会で紹介したことで、教師全員にＥＳＤへの認識が更に深まったこと。

④　外部の機関と連絡調整役を行うとともに、平成２２年度の協力に際しての道筋をきちんと確保したこと。

⑤ 中央小学校の実践を様々な研究会で発表し、ＥＳＤ実践の成果を広めたこと。

ＥＳＤ校内推進委員を含めた教師全員がＥＳＤ総括の果たしたこのような成果を周知し、平成２１年度に確立されたこの学校の体制を今後も持続していかなければならない。

一方では、学校全体としてＥＳＤを推進していくに当たり、新しく本校に赴任してきた教師に研修の機会を与えることを忘れてはならない。

平成２０年度の教師全員によるＥＳＤの認識を共有した第二段階の時期（平成２０年９月～１２月）は、平成２１年度に本校がＥＳＤを推進していくに当たり大切な研修の期間であった。このことを考えると、新しく本校に赴任してきた教員にもＥＳＤとは何かを学ぶ機会を与えることが望まれる。新しく本校に赴任してきた教師に必須でオリエンテーションを行うこともＥＳＤ総括の役割としたい。新しく赴任してきた教師が研修することで、教師全員がＥＳＤとは何かを共有することができ、学校全体が一丸となってＥＳＤを推進することができると考える。

研修を学校の組織として行うには、教務主任とＥＳＤ総括の連絡調整が不可欠である。あくまでも本校における研修の企画の立案の中心は、教務主任である。ＥＳＤ総括がＥＳＤに関する研修を教務主任に提案し、研修の機会を設けるという体制は組織を運営するた

めには大切なことである。教師の異動があっても、前年度の学習内容を踏まえた指導が子どものために生かしていける環境の整備が大切である。

「教師の担任する学年が変わってもＥＳＤの考え方が維持できる」、「新しく赴任してきた教師のＥＳＤに対する認識を引き上げることができる」、この２点に関してはＥＳＤ総括の存在が大きい。

一方では、平成２１年度の実践からは、「学年間のつながりを構築する手段や方法の形成」という課題が見えてきた。平成２１年度は、ＥＳＤ総括が各学年間をつなぐコーディネーター役を果たすことが難しかった。

夏季休業中のＥＳＤカレンダーの見直し作業は各学年において２学期以降の実践に大きく生かされていったが、そのプロセスや見直した内容を異学年間で情報交換することができなかった。

ＥＳＤ総括だけが各学年で現在どのような取り組みをしているかを把握するのではなく、教師全員が共通理解する場を定期的に設ける必要がある。そのためにも「ＥＳＤ校内推進委員会」や「ＥＳＤ実践報告会」などの研修会の企画・運営は、ＥＳＤ総括の役割として年間の行事に位置づけることで学年間をつなぐ体制づくりが進むと思われる。

⑵１年間を見据えた、ストーリー性のあるカリキュラムづくり

年間指導計画をもとに作成したＥＳＤカレンダーのよさは、ＥＳＤの視点が各教科、領域、特別活動の中のどこにあるかが分かること、生活科や総合的な学習の時間の学習と各教科が線でつながっていることによりそれぞれの結びつきが分かることであった。ＥＳＤは、教科の枠を超える横断的な考え方であり、それぞれの教科をＥＳＤの視点で捉えなおすことにより、学年の発達段階を考えたカリキュラムを考え、子どもたちに指導できたことが平成２１年度の実践から見えてきたことである。

各教科で学んだ知識や技能、思考力を基礎・基本とリンクさせ、教科から発展させた教科横断型ＥＳＤカリキュラムの開発は大切な視点である。その点で、生活科や総合的な学習の時間は、他教科での学びをまとめていく、活用できるようになる“集大成”の場であるとも言える。色分けされたＥＳＤカレンダーを見ることにより、１年間の活動の流れは理解できるが、活動のどの場面で子どもたちにどんな力（スキル）を付けたいかまでは見えてこない。

教師は、子どもたちに、学習のどの場面でどのようなことを学ばせたいか、その構成“ストーリー”を考え、全体の流れを組み立てながら、生活科や総合的な学習の時間を展開している。しかしながら、ＥＳＤカレンダーの中からは、このストーリーが見えてこない。各教科と生活科や総合的な学習の時間の関係が明確に現れる工夫をＥＳＤカレンダーの中に加筆・補充することにより、ストーリーが目に見えた形になる。

例えば、３年生であれば、「地域を愛する」という核になるストーリーを作る。そのストーリーの流れの中に「地域の人と関わりながら自分の課題を調べる」「調べたことを発信する」「具体的に行動をおこす」といった細かな活動を組み込む。そして、それぞれの活動の中には、「インタビューする力をつけたい」「調べたことをまとめる力を養いたい」「ガイドブックに表現し、多くの人に伝える力をつけたい」など、何をどういう順番で行うかをＥ

ＳＤカレンダーの中に書き入れるわけである。

４月の年間指導計画とＥＳＤカレンダーの見直しの機会は、このストーリーを作成するにはとてもタイムリーである。同学年で同じストーリーを描いても、それを実践する教師によってストーリーの展開の仕方が異なる。それぞれの教師がもつ個性を発揮し、ＥＳＤカレンダーの生活科や総合的な学習の時間の欄にそれぞれの教師が書き入れる工夫を行うことでもっとＥＳＤカレンダーが充実し進化すると考える。

⑶学校と地域を強くつなぐための方策

子どもたちの学習の場は、身近な地域にたくさんある。

ここからは、「地域」を以下の２つに整理し、学校と地域を強くつなぐための方策を述べることにする。

①子どもとその保護者が暮らす地域

４年生は中央エコキッズとなり、「地球にやさしいTOYAMAに！」をテーマに環境学習を続けている。

チーム富山市（http://www.team-toyama.jp/）の一員として、地域の環境をベースに、環境について調べ、自分たちで実際に行動し、より多くの人と一緒にエコ活動を続けたいと様々な人に向けて発信した。

１学期の活動を経て、１０月１８日（土）のＰＴＡバザーで、「エコフェスティバルｉｎ中央」を開いた際、 子どもたちは手作りの大きなパネルを使いながら地球温暖化による影響やいたち川の環境の現状を伝え、地域の方にエコ活動に取り組むことの大切さや楽しさについて呼びかけた。そして、子どもたちがアイディアを出し合って心をこめて作ったエコグッズを会場で販売し、エコグッズのよさを伝えるために宣伝活動を行った。

これらの子どもたちの姿は、学校で学んだことを生かし、家庭や地域へ行動を起こしていこうとする態度の表れであると考える。子どもたちの生活の基盤である地域にまでＥＳＤの意識が広まったことは大きな成果であった。このように子どもたちの意識が高まるにつれ、保護者の意識の高まりも見られるようになってきた。

家庭で節水や消灯に心がけたり、ＰＴＡバザーの際に「マイバック」「マイ箸」をもって参加したりするよう呼びかけるなどした保護者の意識の高まりの要因は、子どもが学校で調べ、考え、みんなで話し合った経験が態度の変化として現れ、我が子の変化に保護者も影響を受けた現われではないかと考えられる。

このように子どもたちが学校で学んだ姿を家庭へ返していく取り組みを続けていくことが学校と保護者とをつなぐ方策として大切であると考える。

②子どもたちの体験の場である地域

地域は子どもたちにとって豊かな体験の場である。

１・２年生は、地域に出かけ、自然を見つけたり、たくさんの生き物と触れ合ったりと様々な体験活動を行った。

また、３年生は、自分の課題を解決するため地域へ出かけ、多くの人とかかわる体験を数多くすることができた。

子どもたちが地域へ出かけ、自然や人とかかわりを深める体験は、地域を見る視点を

広げ身近な地域には何があるのか期待を高めることにつながる。

子どもたちの体験の場である地域には様々な人々が生活しており、多くの人と関わることでコミュニケーションスキルを高めることにもつながる。子どもたちに様々な体験活動を仕組む上で、教師は地域を把握しておかなければならない。教師自身が地域を歩き、教材研究を行うことや校区の商店街で働く人々との打ち合わせをすることが大切となってくる。このように教師が作った成果を「地域人材マップ」にまとめるなどして次の担任に伝えていく工夫も学校と地域を結ぶ方策として必要となってくる。また、地域は子どもたちの体験の場であると同時に発表の場でもある。平成２１年度は、子どもたちの発表の場としては、ＰＴＡバザー、学校行事である学習発表会があった。また、総曲輪通り商店街グランドプラザ等で、代表の子どもたちが自分たちの今取り組んでいる活動とその成果について発表した。発表の場を確保し、地域まで発表の場を積極的に広めることは、子どもたちの自信につながり励みとなる。このような発表の機会を継続させ、子どもたちの地域を愛する心を多くの人々に伝えていきたい。

子どもを取り巻くすべての大人が同じＥＳＤの価値観に立ってＥＳＤを推進していくことはとても大切である。「地域の中の学校、地域の一員である子どもたち」、この関係を絶やすことなく今後も地域の中で子どもたちの力を育んでいきたい。また、学校を生かした地域力の向上を目指し、個の力を地域の力につなぐパイプ役としての学校の果たす役割は、今後も大切になってくると考える。

⑷知のネットワークづくりの確立

本校の校区には、富山市科学博物館、富山県立近代美術館がある。博物館や美術館は、未来を担う子どもたちに科学や文化、芸術に触れる感動や楽しさを伝え、子どもたちの感性や想像力を刺激し一人一人の可能性を引き出すことができる施設である。また、富山市にあるファミリーパークは、動物園として郷土の動植物の知識を普及することや、さらには呉羽山の里山に着目し、動物の保存と合わせて里山の役割をクローズアップする役割なども担っている。

平成２１年度は、４年生以上が地域文化の振興の重要な拠点である富山市科学博物館・富山県立近代美術館を見学したり、２年生は、ファミリーパークで「わくわく田んぼ」の体験活動を行ったりした。教育の専門家である教師と専門的知識の豊富な学芸員や指導員が互いに協力することによる効果は大きく、子どもたちが解決できた喜びを味わい、さらに新たな問題を調べたいという意欲につながると考える。

そのためには、地域の多様な関係者とＥＳＤに関する情報や経験を交流できるような積極的な対話の場の提供が必要になってくる。また、ＥＳＤを推進しようとする様々な関係者に対して適切な助言や資料提供するような地域の知識のデータベースを構築していくことも考えなくてはならない。ＥＳＤを推進していくためには、知識専門機関のバックアップが不可欠である。今後は、学校と知識専門機関がリンクし、「知のネットワーク」づくりを進めることが大切である。

⑸ユネスコ・スクールとしての中央小学校の在り方

平成２１年度、本校がユネスコ・スクールとしてのメリットを最大限に発揮しているとは言い難い。しかしながら、教師間の交流は、少しずつ生まれてきた。東雲小学校や面瀬小学校を始めとする気仙沼の多くの小学校と学校の取り組みなど様々な情報を交換することができた。また、日本ユネスコ協会連盟や富山ユネスコ協会の方から世界の子どもたちの現状やユネスコ活動についての話を聞くことができ、様々な専門機関と連携を図ることができた。ユネスコ・スクールは、多くの人とつながりを深めるための大切なネットワークである。

ユネスコ加盟国にある世界の多くの学校は、手を取り合い、枠組みや地域を越えてユネスコ・スクールに参加している。本校も国内外のユネスコ・スクールのネットワークを活用し、教師ばかりでなく、子どもたちも様々な学校と交流しながら情報を共有していくことが今後期待される。ＥＳＤという同じ価値観に立っている学校同士は交流しやすく、ユネスコ・スクール間で実践を紹介し合うことで、お互いの取り組みを励まし合ったり、認め合ったり、喜び合ったりできると考える。

Ⅱ　本校におけるＥＳＤ２年目〈平成２２年度〉の取り組み

平成21年度は、教師も子どもたちも試行錯誤しながらＥＳＤの実践に取り組んだ１年間であった。

ＥＳＤを推進することで様々な成果があった一方で、「教師全員による共通理解の場の設定」、「１年間を見据えたストーリー性のあるカリキュラムづくり」、「学年間のつながりを構築する手段や方法の形成 」などの課題も見えてきた。

ここからは、「教師全員による共通理解の場の構築」、「１年間を見据えたストーリー性のあるカリキュラムづくりの方策」を紹介し、平成２１年度の課題がどのように修正されていったかを説明していきたい。

１　教師全員による共通理解の場の構築

教師の異動があっても、前年度の学習内容を踏まえた指導が子どものために生かされる環境の整備が大切である。

本校では、平成２２年度の異動に伴い７名の教師が赴任し、新しい体制でスタートすることになる。

⑴校長や教頭などの学校の幹部と教務主任を中心としたＥＳＤ校内推進委員のＥＳＤに対する認識の継続

本校に新しく赴任した校長は、ＥＳＤに対する基本的な考え方を日々の授業実践の中に取り入れていく方策が大切であることを教師全員に呼びかけた。学校経営のリーダーである校長がＥＳＤを推進する上で明確な方向性を教師全員に示すことはとても大切である。ＥＳＤを決して特別なものとして考えるのではなく、自然な形で教育活動の中に取り入れていきたいという考えがＥＳＤ校内推進委員の共通認識であることは、前年度と変わりはない。新しく赴任してきた教師は、決して無理をせず、「ＥＳＤを知ること」からまずはスタートした。

４月に行われた全体研修会では、ＥＳＤ校内推進委員を含めた全員の教師が「平成２１年度の実践から見られる成果と課題、今年度の方向性についての共通理解を図った。年度始めのこの時期に、新しく赴任してきた教師ばかりでなく、新担任にとっても実践を通して見えてきた子どもの姿を振り返り、新年度に作成するＥＳＤカレンダーにおける学習のつながりを確認することは大切である。新担任は、１年間を通して、学級の子どもたちをどのような子どもに育てたいかを思い描くことは、ＥＳＤ実践に向けては不可欠な要素である。

学校全体でＥＳＤを推進していくためには、ＥＳＤ校内推進委員のＥＳＤに対する認識のもち方が大切である。

ポイント

・　教員の異動に伴い学校の体制が変わっても、校長を中心とするＥＳＤ校内推進委員がＥＳＤをどう推進していくか、その方向性をしっかりもつことが大切である。

⑵ＥＳＤ総括を中心とした校内体制づくり

本校では、校務分掌にＥＳＤ総括を位置づけ、ＥＳＤに関する研修会の計画・運営や外部機関との連絡調整を行っている。平成２２年度は、ＥＳＤ総括だけが各学年の取り組みを把握するのではなく、教師全員が共通理解する場を定期的に設ける必要があると考え、ＥＳＤ校内推進委員会、ＥＳＤ実践報告会を設置することにした。年度始めの研修会で、ＥＳＤ総括からＥＳＤ推進に向けての校内体制について全員の教師に共通理解が図られる。

－ＥＳＤ推進のための今年度の校内体制－

＜組織の改善＞

○ＥＳＤ校内推進委員会を設置する。

・　各学年、特別支援学級から１名　委員として参加する。

※　ＥＳＤ校内推進委員会で話し合われたことは、学年に持ち帰り、各担任が共通理解を図る。

・　ＥＳＤ総括が委員長として、進行係・外部機関との連絡調整を行う。

○ＥＳＤ実践報告会を設置する。

・　夏季休業中に各学年の取り組みを紹介し、ＥＳＤカレンダー、学習構想図の見直しを行った結果、よかった点や今後の方向性を紹介する。

・　実践の状況を報告しあったり、前年度の学習内容を踏まえ、子どものために生かしていける環境の整備を検討しあったりする。

＜各担任が行うこと＞

○ＥＳＤカレンダー、単元構想図の作成・見直しを行う。

○年度末に、Ａ２判のパネル作成し、各学年の取り組みのあゆみを残す。

＜新たな学校行事の設立＞

○全児童が参加するＥＳＤ活動報告会（中央っ子フェスティバル）を行う。

（ＥＳＤカレンダーや学習構想図にも位置づけ、貴重な発信の場として計画的に進める。）

５月の初めに行われた第１回ＥＳＤ校内推進員会では、各学年のテーマの設定、ＥＳＤカレンダーや学習構想図（学習構想図については、「１年間を見据えたストーリー性のあるカリキュラムづくりの方策」で述べることにする）についての説明がなされた。ＥＳＤカレンダーや学習構想図の作成は、平成２１年度末に、前担任が見直しをかけて新年度に申し送りを行っているので、ゼロからのスタートではない。

しかし、作成に当たっては、現在の学年の子どもたちの実態を踏まえ、教師が思い描くストーリーを考え、単元を入れ替えたり、新しい活動を盛り込んだりするなど修正を加える点も出てくる。担任は、出来上がったＥＳＤカレンダーや学習構想図をもとに学習を展開し、夏季休業中には、１学期の取り組みを紹介するＥＳＤ実践報告会を行った。

ＥＳＤ実践報告会では、各学年の取り組みを紹介するばかりでなく、作成したＥＳＤカレンダーや単元構想図をもとに学習を展開してよかったことや問題点、外部連携機関

との連携の効果、２学期に向けての取り組みの方向性が報告された。ＥＳＤ実践報告会は、平成２１年度の課題であった各学年がＥＳＤカレンダーや学習構想図の作成のプロセスや見直した内容を紹介し合い、教師全員が学年間のつながりを共有する場となった。

本校で考えるＥＳＤとは、「わたしたちと世界中の人々が生き続けていける未来をどうやってつくっていくかを学校や家庭・地域・国・世界を舞台にみんなで調べたり、考えたり、意見を出し合ったりしながら行動していける子どもや大人になるための学習」である。そこで、教師全員がＥＳＤの視点をもち、全教育活動の中で日々実践を積み上げていくことが大切であると考える。

教師全員が共通の認識をもつには、ＥＳＤ実践報告会のような情報交換の場はとても有効であり、学年間のつながりが構築される手段ともなる。情報交換の場がたくさんあればあるほど、教師の認識が深まるが、学期の途中に長い研修の時間を確保することが難しいのが現状である。

夏季休業や冬季休業を利用し、研修を行う機会をしっかりと確保していくことが今後の課題である。

ポイント

・　ＥＳＤ校内推進員会やＥＳＤ実践報告会の開催を行事予定に位置づけ、学校全体で情報を共有することが学年間をつなぐ有効な手段である。

２　１年間を見据えたストーリー性のあるカリキュラムづくりの方策

教師は、子どもたちに学習のどの面でどのようなことを学ばせたいのか、その構成「ストーリー」を考え、全体の流れを組み立てるようにしている。しかしながら、ＥＳＤカレンダーからは１年間の活動の流れは理解できるが、活動のどの場面で子もたちにどんな力をつけたいのかは見えてこないことが課題であった。

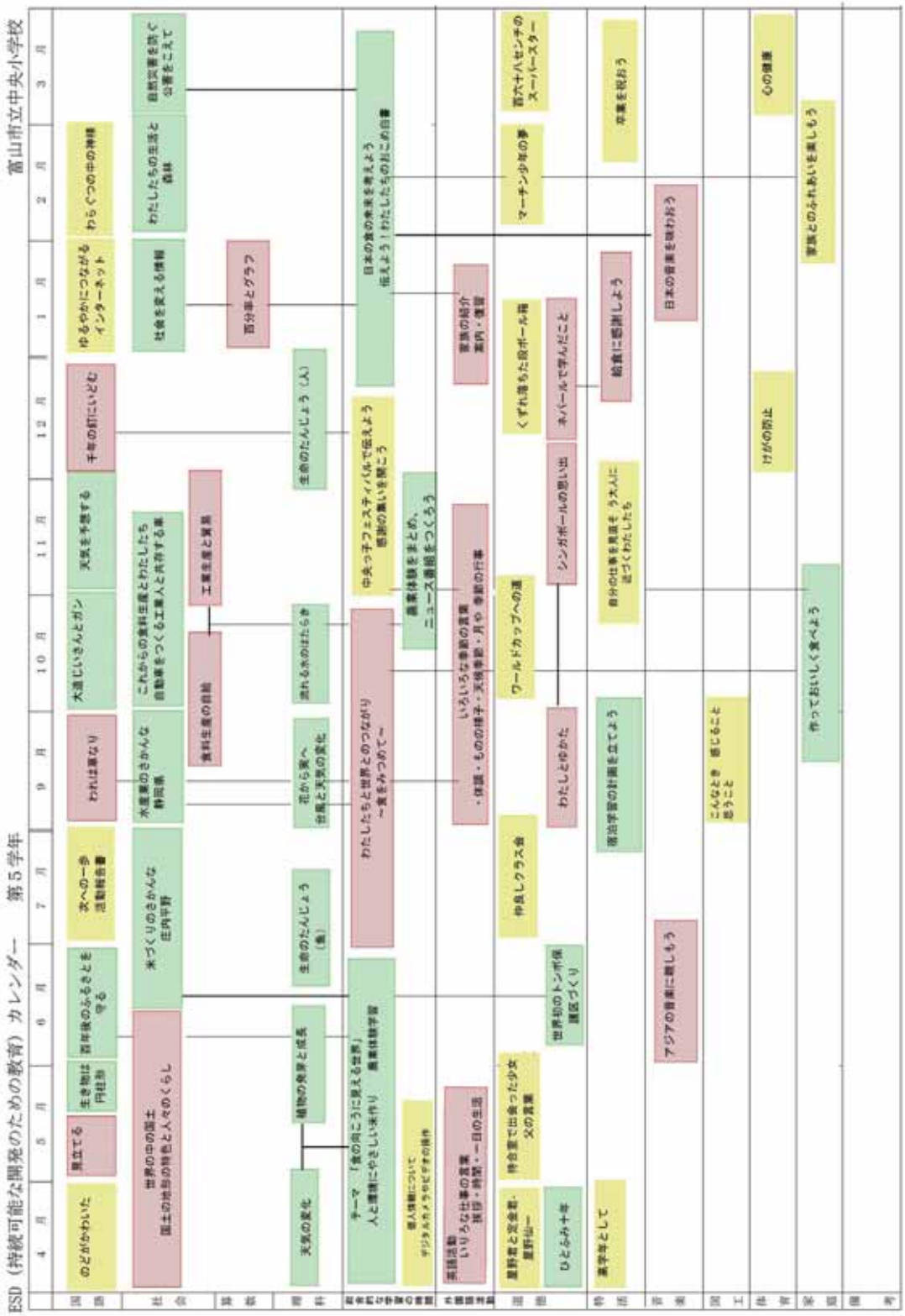
⑴ＥＳＤカレンダーを発展させた新たな指導計画の活用

平成２２年度に活用を図った学習構想図は、生活科や総合的な学習の時間を中心として教科との関連を明確にし、ストーリーを目に見える形にした指導計画である。作成に当たって担任は、横軸に流れるＥＳＤカレンダーに書き入れられない細かな活動内容とそれに関係する教科・領域・特別活動・学校行事との関連、外部協力機関との連携などを盛り込むように心がけた。

学習構想図は、ストーリーの流れの中に「人とかかわりながら自分の課題を調べ解決する」「調べたことを発信する」「具体的に行動をおこす」といった細かな活動を組み込み、それぞれの活動の中に、「伝える力」「調べたことをまとめる力」「コミュニケーション能力」など、子どもたちに付けたい力をとのような活動で養うかを時系列に沿って表したものである。学習構想図のよさは、ＥＳＤカレンダーを進化させ、各教科と生活科や総合的な学習の時間の関係が明確に現れる工夫を行い、子どもの思考の筋道を丁寧に表したことで、教師自信の思い描いたストーリーが一目で伝わってくることである。平成２２年度は、新担任がＥＳＤカレンダーと学習構想図を使って、子どもに付けたい力を考えながら、学習の見通しをもって活動を進めることになる。

ここからは、担任がどのようなプロセスを経て学習構想図を作り上げていったかを５年生を例に挙げて説明していきたい。

○５年生のＥＳＤカレンダー



第５学年

「食の向こうに見える世界」　学習構想図

活　動　内　容　（主として総合的な学習の時間）	教科・領域との関連
食の向こうに見える世界	道「いっしょに何をしようかな」
人と環境にやさしい米作りに挑戦しよう	社「米づくりのさかんな庄内平野」 「水産業のさかんな枕崎市」 「これからの食料生産とわたしたち」
稲作体験活動 セントラル水田 手作り田んぼ ・土の入れ替え、しろかき ・田植え ・水の管理 ・稲の生長観察 ・病害虫への対策 稲作体験活動 飯田農場 有機・無農薬栽培 ・種籾まき ・丈夫な苗づくり ・草とり ・手作業と機械作業 ・農家の願い、努力、工夫 食調査活動 ーお米・食生活ー わが家の食べ物の選び方 安全・安心な食物 産地・価格 ２年生との協同栽培（大豆）	国「お願いの手紙お礼の手紙」 「サクラソウとトラマルハナバチ」
これからの食料生産 日本の食料自給率 有機農業の現状と課題 消費者の意識 輸入食物の安全性	理「天気と気温の変化」 「植物の発芽と成長」 「生命のたんじょう」
稲作体験と食生活から食料生産を考えよう ・稲刈り ・天日干し ・脱穀・精米 ・大豆の収穫 ・きなこ作り ・大豆加工品	家「かんたんな調理をしてみよう」
比べてみよう、世界の米作り わたしたちと世界とのつながり ～食をみつめて～	特「宿泊学習の計画を立てよう ―仲間とつくる山のくらし―」
感謝の集いを開こう 収穫の喜びを味わおう ・手作りのお米と大豆でおはぎ作り ＜中央っ子フェスティバル＞ 稲作体験を伝えよう これからの日本の食生活を考えよう ４年生に伝えよう ～食生活見直しの啓蒙～ 外国から来る米 米と日本の文化 米にまつわる伝統行事 米事情の移り変わり 加工される米 日本の食生活の変化 命のつながり 作っておいしく食べよう ニュース番組をつくろう ・情報と社会 ・農業体験のまとめ わたしたちの提案 「これからの米づくり」	国「人とものの つき合い方」 家「作っておいしく食べよう」 社「情報と社会」 ＜ICT 活用＞ 「ニュース番組作り」 「プレゼンテーション」
日本の食の未来を考えよう 伝えよう！ わたしたちのお米白書 わたしたちの提案 「食とわたし～食生活を見直そう～」 地球にやさしいくらしの提案 お世話になった方々を招いての討論会 世界との関係も考えながら、自給率の低い日本で、安心した食生活がおくれるように自分たちにできることから実行していこう。	社「さまざまな自然とくらし」 「わたしたちの生活と環境」 「わたしたちの生活と森林」 家「家族とのふれあいを楽しむ」
引き継ごう私たちの稲作体験 ４年生への引き継ぎ 「人と環境にやさしい米作り」への願い 引き継ごう 世界寺子屋運動 ６年生からの引き継ぎ ６年生のActionsの思い 世界の子どもたちへの関心	道「わたしたちの町って」 特「給食に感謝しよう」

５年生は、「食の向こうに見える世界」をテーマに、稲作体験を通して一粒のお米が育ち、口に入るまでには様々な苦労があることを知り、食の安全や大切さ考える学習を展開した。５年生の学習構想図の中には、ねらいの達成に向けての様々な手立てが伺える。

５年生は、４年生の終わりに「セントラル水田」を引き継ぎ、土づくりの大切さ、環境に配慮した有機栽培の大変さと必要性を引き継ぎ、自分たちの手で「安全・安心でおいしいお米をつくりたい」という願いをもって５年生に進級した。

＜教師が学習構想図の中に盛り込んだ手立て＞
- 家庭との連携を密にする
- 人材を広く繰り返し活用する
- 図書館司書と連携する
- メディアの活用する

新担任は、米作りについてはある程度見通しをもつことができている実態をふまえ、平成２１年度に前担任が作成したＥＳＤカレンダーを修正し、学習のゴールを「日本の食の未来を考える」とし、食全体をテーマとして考え、実践していくように設定し学習を展開した。学習を展開していくにつれ子どもたちは、農作業の大変さを肌で感じ、社会科で食料生産の現状を学習していったことを体験と重ねながら、「日本の食生活は、このままでいいのだろうか」という課題をもち始めた。

そこで、教師は、給食や家庭での食事といった身近な食生活など食を通した世界のつながりまで子どもの問題意識が連続していくように様々な手立てを学習構想図の中に盛り込んでいった。子どもたちは、集めた情報を整理したり、分析したりして自分の考えをまとめ、表現していく過程において、各教科で学んだ知識や技能等を主体的に活用していった。また、総合的な学習の時間の体験活動を国語科や社会科の学習素材とすることで、学習に深まりと広がりを生み出すことができた。

教師は、学習構想図を活用することにより、ＥＳＤカレンダーに詳しく書き入れることができなかった道筋を丁寧に描くことができ、子どもに見通しをもたせ学習を展開することができたと考える。

ポイント
- 学習構想図は、子どもの実態を考えながら作成するので、教師の個性が発揮される。
- 学習構想図は、ＥＳＤカレンダーと同様、その都度、加筆・補充していくことが大切である。
- 教師は、ＥＳＤカレンダーと学習構想図を教科、領域を超えた学びの設計図として有効に活用する。

⑵子ども同士の学びを深める中央っ子フェスティバルの開催

平成２１年度は、１年生から６年生までの全クラスがＥＳＤの取り組みを学習参観という形で保護者に公開した。また、この日は「第２回富山ＥＳＤ講座」も兼ね、学校全体としてＥＳＤを実践している様子を教育関係者に参観していただいた。

教科学習での学びと体験活動を重視した問題解決的な学びを相互に関連させることで、自分のできることから行動し、自分の生き方を見つめていった子どもの姿は、１年目のＥＳＤ実践の成果であった。

そこで、平成２２年度は、子ども同士が学び合いを深める場を設定したいと考え、全

児童が参加するＥＳＤ活動報告会（中央っ子フェスティバル）を行うことにした。

中央っ子フェスティバルは、子どもたちが半年間の活動を見つめ直し、一人一人が思いや考えを１つ下の学年（１年生はお世話になった６年生に伝える）に発信する中間発表の場として位置づけ、１１月下旬に開催された。（平成２２年度は、保護者の参観はなく、「第２回富山ＥＳＤ講座」を兼ね、教育関係者の参観のみであった。）

夏期休業中に行われたＥＳＤ校内推進委員会では、中央っ子フェスティバルは、子どもたちに相手意識や目的意識をはっきりもたせ、一人一人の考えや思いを自分の言葉で語る「伝え合う場」であることが共通理解される。

ここでは、２年生の取り組みを例に子どもの姿から見られた中央っ子フェスティバルの成果を紹介する。

２年生は、中央っ子フェスティバルのテーマを「伝えよう１年生へ！見つけたこと・育てたこと・ふれ合ったこと」とし、生活科で学習した「野菜作り」「町探検」「ファミリーパークでの体験」について、１年生を意識して伝える手段を考えた。

初めてこのような学習形態で発表する２年生に、教師は、以下の手立てを行った。

- グループで「どんなことを伝えたいのか」「どんな方法で伝えようと思っているのか」を十分に話し合い、はっきりさせる。
- 中央っ子フェスティバルまでの見通しをもたせるため、スモールステップの予定ワークシートを利用し、毎回自己評価する。

子どもたちは、劇、ペープサート、紙芝居、大型絵本など、伝える方法をグループで話し合いながら決定し、もっと分かりやすくするために劇の中に３択クイズを取り入れたり、トマトのお面やスプレーの小道具などを準備したりするなど工夫を凝らし１年生に伝えることができた。

このように、グループで伝えたいことをはっきりさせたことは、互いに意見を出し合い、協力し合いながら学びの質を高めていったと考える。

教師は、日頃の学習活動の中で相手を意識して、伝える力を十分に養うことを心がけていた。そして、中央っ子フェスティバルでは、「１年生にわかるように、はっきり、ゆっくり、目を合わせて伝えよう」と声をかけた。

発表当日は、緊張しながらも１年生のことを考え、張り切って伝えようとする子どもたちの姿がたくさん見られた。

発表を終えたあと、１年生の子どもたちからは「楽しかった」という感想がたくさん聞かれ、２年生の子どもたちは、しっかりと伝えられた満足感、自分たちの発表を聴いてもらえた喜び、やり遂げた成就感を味わっていた。

一方で、３年生の「発見・発信・中央小探検隊！」の発表を聴く側にもなった２年生の子どもたちは、自分たちの発表の仕方と比べることで、３年生のよさをたくさん感じ取ることができた。

３年生の発表では、体験コーナーが数多く取り入れられ、２年生の子どもたちは、中央小学校校区のすばらしさを実際に体験して実感できたことが多く、発表の仕方のよさ

に気づくことができた。

中央っ子フェスティバルで異学年交流を行ったことにより、次のような成果があったと考える。

＜発表を伝える側＞

・　自分たちの活動をまとめることによって、自分たちが取り組んできたことの成果を実感するとともに、お世話になった方への感謝の気持ちをもつことができた。

・　どんな内容をどのように伝えたら分かりやすいかを考え、相手意識をもって活動を進めていくことができた。相手の立場に立って考える“人にやさしい”心が育ってきた。

・　伝えることができた、しっかり聴いてもらえたという成功体験が満足感や成就感につながった。

＜発表を聴く側＞

・　発表の仕方のよさに気づき、自分たちのこれからの発表に取り入れていきたいという意欲をもつことができた。

・　次の学年でどんなことをするか見通しが立ち、活動意欲をもつことができた。

子どもたちは、人に伝えることの難しさを学んだ分、やり遂げた達成感も味わっている。今年度行った中央っ子フェスティバルは、伝える相手が下の学年と決まっている中で表現を工夫していくため、相手意識、目的意識もはっきりとし、企画・表現・場の設営などを主体的に進めることができた。また、経験が表現力の向上へとつながり、「何をどのような形で見せたら関心をもってもらえるか」「どんな構成で話をすれば短時間で理解してもらえるか」などグループで真剣に話し合われた。

子どもたちは、これまでの体験や調べ活動の整理、分析を行い、伝えるために自分の考えとしてまとめる活動を通して、一人一人の考えが明らかになったり、課題が一層鮮明になったり、新たな課題が生まれたりしてきたと考える。

これは、学習として質的に高まることであり、深まりのある探究活動を実現することになると考える。他者とかかわり、協同的に学び合う場を工夫して設定することは、一人一人の子どもの学びの質を高めていくことにつながると考える。

ポイント

・　中央っ子フェスティバルでは、子どもに発表相手をしっかりと意識させることが大切である。

・　学年間の教師のつながりがあって、子ども同士のつながりも生まれてくる。

中央っ子フェスティバルの実践

ＥＳＤを実践するに当たっては、テーマ「自然にやさしい　人にやさしい　やさしい中央っ子」のもと、各教科や領域、学校行事との関連を図りながら、生活科や総合的な学習時間を中心に各学年特色ある取り組みを行っている。

中央っ子フェスティバルは、その成果を他の学年に見てもらう活動報告会である。当日はポスターの掲示やプレゼンテーション、クイズ・ゲームなどの遊び、劇や紙芝居など多様な法で発表したり、体験したりする活動に取り組んだ。

（１年生）「なかよし　いっぱい！　ー秋フェスティバル　６年生を招待しようー」

四季を通じて同じ公園に足を運び、季節を体で感じ、自然とふれ合ったり、身近な人たちとの交流活動を行ったりして、「なかよし」を広げ、深めてきた。校区にある公園で自然を観察したり、木の実や木の葉などを使って遊びの道具を作ったり、それを使って遊んだりしながら、自然のよさを体験的に学ぶことができた。また、友達と「遊びのコーナーづくり」の活動に取り組みながら人とかかわり合う力を伸ばすことができた。さらに、日頃お世話になっている６年生を遊びのコーナーに招待し喜んでもらおうと、友達と協力して準備をしたり、説明の練習を行ったりし、その成果をのびのび発揮していた。

落ち葉のドレスでダンス

（２年生）「見つけよう 育てよう ふれ合おう　ー伝えよう１年生へー」

野菜やザリガニをじっくり育てたり、ファミリーパークの農業体験を通して自然とふれ合ったりしながら、命を大切にする学習に取り組んだ。

子どもたちは一人一鉢の野菜に愛情を注いで育てたり、富山市ファミリーパークでの農業体験をしたりした。野菜の種類や大きさがそれぞれ違っていても、みんなの野菜が元気に育ってほしいという願い、自分たちになりに工夫や努力したという思いを共有していた。また、伝える相手が１年生であることから、劇、ペープサート、紙芝居、大型絵本などの発表方法をグループごとに考えた。相手の立場を意識し、相手に応じてかかわる力を高めていった。

野菜作りクイズ

（３年生）「発見！発信！中央小探検隊　ー伝えよう　ふるさとのたからものー」

地域を流れるいたち川やお地蔵さん、校区の老舗など、それぞれが心を寄せた場所に何度も出かけて見学や取材を行い、地域のよさを発見していった。町探検の学習を行っている２年生に発表することから、事実だけではなく、「人のやさしさ、校区で作られた物の魅力、安らぎや癒しのある場」など、校区を探検し、調べたことを語り合う中で、感じ合った思いも大切にしたいと取り組んでいた。また、自分たちの思いを分かりやすく伝えようとクイズやゲーム、体験コーナーなど発表方法を工夫する姿があった。

体験コーナーで丸薬づくり

（４年生）「レッツゴー！いたち川サポーター　ーいたち川のよさを伝えようー」

いたち川の調査活動や美化活動、また地球温暖化防止のエコ活動に取り組んだ。「もったいない」を合い言葉に、いろいろな場でエコ活動を呼びかけていった。

国語科の「四年生から発信しよう」の学習を生かし、いたち川の自然や歴史からみてきたいたち川と人々のかかわりについて、自分なりに主張したいことを新聞づくりや劇等で表現していった。伝えたい内容や思いが３年生に届くようにインパクトのある写真を選んだり、見出しの工夫をしたりした新聞（パネル）を用いながら熱心に説明する４年生の子どもたちであった。

いたち川の魅力を発表

（５年生）「食の向こうに見える世界　ー米作り体験を通してー」

自分たちの手で水田を作り、環境にやさしい米作りに取り組んできた。有機栽培農家での体験を通して、消費者・生産者両方の立場から「食」について考えを深めてきた。

発表を終えた５年生が「４年生は静かに真剣に聞いてくれたのでうれしかったです。私はこの発表で、５年生にセントラル水田を引き継いでほしい、私たち５年生が体験した米作りの大変なことや楽しいこと、やった人にしか味わえないことをぜひ味わってもらいたいという気持ちになりました」と感想を述べていた。

食生活を見直そう

（６年生）「Actions,not Words ー自分にできることから始めようー」

世界の子どもたちのために、今自分にできることを考えてプロジェクトを立ち上げ、自分の生活を見直しながら書き損じハガキの回収の呼びかけや募金活動に取り組んできた。６年生は５年生に世界の子どもたちの現状を伝えようとコンピュータを活用して発表原稿を作り、練習を重ねた。当日は、一人一人が調べて分かった事実や体験をもとに、自分の思いや考えを堂々と発表した。その発表を聞いている５年生の目は、とても真剣であった。

また、６年生は１年生の「なかよしいっぱい」の活動を通して交流した。「このゲーム、楽しいよ」と１年生に優しく声をかけたり、落ち葉のドレスを着て一緒にダンスを楽しんだり、とてもほほえましい姿がたくさん見られた。

世界の子どもたちの現状を伝えよう

３　成果と平成２３年度に向けての課題

⑴校内体制の維持に向けてのＥＳＤ研修の在り方

本校に赴任した教師は、１年間のＥＳＤ研修や授業の実践を通して、ＥＳＤは特別な教育ではなく、日々の授業の中にＥＳＤの視点をどう取り入れていくかが大切であることを知り、ＥＳＤを実践することにより、子どもの育ちからその効果を感じることができたと考える。学校全体としてＥＳＤを推進していくに当たり、新しく本校に赴任してきた教師に研修の機会をもつことは大切である。また、ＥＳＤ研修は、在籍していた教師にとっても学年がかわり新たなＥＳＤの視点をもつには有効な機会である。

平成２２年度は、ＥＳＤ総括がＥＳＤ校内推進委員会やＥＳＤ実践報告会を運営し、様々な情報を共有しながら、学年間のつながりを構築したことは大きな成果であった。しかしながら、現状を考えると学校行事や校務分掌の多忙さから、全員の教師がじっくりとＥＳＤ研修を行うための時間を確保することは難しい。研修の開催時期や持ち方を工夫することで、充実した研修の機会になるように改善を図っていきたい。

教員の異動に伴い、学校としての体制を継続していくことは課題である。そして、本校がＥＳＤを推進する学校としての体制の維持に向け、今後は、ＥＳＤ総括の後継者やＥＳＤを推進していく上で大切な役割を果たす新たな人材の育成を進めていかなければならない。

⑵中央っ子フェスティバル開催の効果と今後の展望

中央っ子フェスティバルのような新しい取り組みに挑戦できたのは、本校の教職員がＥＳＤの認識をもち、育てたい子ども像をしっかりと思い描いているからであると考える。一人一人の子どもたちにとっては、中央っ子フェスティバルに参加し、他者に自分の思いを伝えられたこと、それを聞いている人が自分の思いをしっかりと受け止めてくれたことが大きな自信となったに違いない。そして、その自信が将来にわたって他者に働きかける大きな原動力となっていくと考える。

また、中央っ子フェスティバルを参観していただき教育関係者の方々は、子どもたちの姿から、ＥＳＤを実践すれば、自然の豊かさや生き物の命を大切にしようとする心や自分でできることを考え、実践するたくましさなど、子どもたちにどのような力が育つかが伝わったにちがいない。

学校全体としての取り組みを発信していくことが、これからＥＳＤに取り組んでいく学校に多少なりとも参考となることを願っている。中央小学校は、そのような大切な役割を担っていることを自覚して、自校のＥＳＤを持続発展させていきたい。

Ⅲ　本校におけるＥＳＤ３年目〈平成２３年度〉の取り組み

本校では、２年間のＥＳＤの取り組みを通して、ＥＳＤ推進への道筋が少しずつ明確になってきた。

ここからは、新たな課題と向き合いながら取り組んだ３年目の実践について述べることとする。

⑴ＥＳＤ総括の役割の再認識

平成２３年度は、新しい教頭が本校に赴任し、新たなＥＳＤ校内推進委員の形成からスタートすることになる。ＥＳＤの推進に向けての校内体制も大きく変わり、新たな教師がＥＳＤ総括の役職を引き継ぐこととなる。

ＥＳＤ総括の役職を担う教師は、ＥＳＤの認識をもち、ＥＳＤカレンダー等のカリキュラム作成のプロセスを理解していなければならない。

本校では、ＥＳＤ総括以外の教師も、ユネスコ・スクール全国大会やダブルネット・ワークショップなど県内外の研修会に参加し、中央小学校の実践発表や他校と情報交換を行いながらＥＳＤの認識を深めてきた。

また、金沢大学教授の鈴木克徳先生のもとに内地留学し、ＥＳＤについて研究した教師もおり、開校時から教師全員で中央小学校のＥＳＤを推進していていこうという姿勢に変わりはない。

平成２３年度にＥＳＤ総括の役職に就いた教師は、前ＥＳＤ総括からアドバイスを受けながら、研修会の企画・立案、学年間をつなぐコーディネーター、外部との連絡調整などの仕事に熟知しようと心がけていた。

今後、このような役職の交代を視野に入れながら、県内外の研修会への参加やＥＳＤ総括の補佐等を通して、ＥＳＤの認識を高め、新たな人材の育成を行っていくことが大切である。

ポイント

・　ＥＳＤ総括の役職を担う教師の育成を行うことは、学校としての体制を維持していく上で大切な要素である。

⑵新学習指導要領実施とＥＳＤカレンダーの見直し

平成２３年は新しい小学校学習指導要領が完全実施となった。本校では、５年生６年生の総合的な学習の時間は昨年に比べ５時間の減少にとどまったが、４年生は４０時間の減少、３年生は３５時間の減少となった。また、教科書も新しく変わり、教科間をつなぐＥＳＤカレンダーも大幅に見直しを迫られた。基本的には前学年が平成２３年度のＥＳＤカレンダーの基礎を作成したが、新学期に入り、新しい学年で相談して総合的な学習の時間の目標や内容、時数、他教科との関連図（学習構想図）を再構成した。　以下は、今年度の各学年の学習テーマである。

１年生…「なかよし　いっぱい」

生活科を中心に身近な人々や自然とかかわり合う中で、豊かな気づきと愛着を育み、自分なりの思いや願いをもって行動できるようにする。

２年生…「ともに生きる　～見つけよう、育てよう、ふれ合おう～ 」

自分の思いや願いをふくらませ、身近な人々や自然とかかわりながら、主体的に活動することができるようにする。

３年生…「発見！　発信！　中央小たんけんたい」

校区探検で人、物、ことと繰り返しふれ合うことで、中央校区のよさを見付け、校区に愛着をもち、自分も地域の一員として校区のよさを大切にしていこうとする。

４年生…「地球にやさしいＴＯＹＡＭＡに！～レッツゴー！中央小エコキッズ～」

身近な地域の環境や地球上の様々な環境問題について調べたり考えたりして、自分たちにできることを考えて実践する。

５年生…「食の向こうに見える世界」

食料生産と消費のあり方から国際協力や環境について考え、これからの食生活や食料生産にいて学んだことを生かし実践する。

６年生…「Ａｃｔｉｏｎｓ，ｎｏｔ　Ｗｏｒｄｓ」

被災地や世界の子どもたちの現状を知り、自分たちの生活と比較しながら調べ、自分たちにできることは何かを考えて、主体的に実践する。

２年生　ファミリーパークで畑の開墾作業

５年生　飯田農園で稲刈り作業

今年度は、中学年の総合的な学習の時間を大幅に見直す必要があった。しかし、昨年度実施した学習内容を踏襲したため、かなりの時間を費やしてしまった。次年度以降、総合的な学習の時間の学習内容や評価規準、総時数などをもう一度見直し、ＥＳＤカレンダーを作り直す必要が出てきた。

本校では総合的な学習の時間や生活科の時間を核として他教科と関連づけながらＥＳＤを実践している。ＥＳＤ実践１年目から学校の教育活動すべての中でＥＳＤを視野に入れた授業や活動を実践してことの重要性を認識していたが、総合的な学習の時間だけでは「ＥＳＤで目指す子どもの姿や態度」は育てられないことを改めて実感した１年であった。

⑶長期休業中に行った、ＥＳＤ実践報告会

本校では、この２年間で、７年未満の若手の教師が大変増えてきた。平成２２年度の課題には、「ＥＳＤ研修を行う十分な時間を確保し、じっくりと学年間のつながりを構築すること」が挙げられていた。平成２３年度は、この課題をクリアすべく、夏季休業と冬季休業の２度にわたって校内ＥＳＤ実践報告会を行った。

休業中に研修会を開催するメリットは、出張や校務分掌にとらわれず、全員の教員が参加できること、研修に必要な十分な時間が確保されることである。

冬季休業中のＥＳＤ実践報告会では、新しく赴任した教師と学年を組む学年主任の立場から、中央っ子フェスティバルまでのカリキュラムをどう作り上げていったか、子どもたちに付けたい資質や能力や態度を考え、どのように活動を仕組んでいったかなど、各学年の実践や成果を紹介し合った。また、この研修会では、二つの新しい取り組みを行った。

一つは、発表会の終わりにＥＳＤ総括が各学年のＥＳＤ実践のよさを総括したことである。今後も様々な機会を利用し、各学年の取り組みを総括し、まとめていくことがＥＳＤ総括の役割の一つであると考える。

二つ目の試みは、ワークショップ形式の研修会を開いたことである。ワークショップでは、低・中・高学年の３つのグループ（特別支援級は、低学年に所属）で、教師が教科の中にＥＳＤの視点を見つける方法や様々な学校と交流する方策、評価に生かすワークシートの活用の仕方など、ＥＳＤを実践して分からないことを本音で語り合った。このワークショップを通して、個々の教師が試行錯誤しながらＥＳＤの実践に取り組んでいることが分かり、同じ悩みをもっている教師同士のつながりも生まれた。

＜総括された各学年のよさ＞

- ＥＳＤカレンダーや単元構想図を活用し、教科・領域・特別活動との関連が図られていること。
- 教師のねらいがはっきりし、活動のスタート時から、子どもたちに目標をしっかりもたせていること。
- 相手意識を個からグループへ、そして他学年、地域へと広げ、様々な対象とかかわりを深める工夫を行っていること。
- 教師は、子どもたちに付けたい力を明確にし、体験を仕組んでいること。
- 振り返りカードや評価カードを工夫し、付いた力を次の活動や学年に生かそうとしていること。

ワークショップ形式の研修会

ポイント

- ＥＳＤ実践報告会は、長期休業中に時間をかけて行うことが効果的である。
- ＥＳＤ研修会を開くには、学校行事にその開催時期をしっかりと位置付け、計画的に運営することが望ましい。

Ⅳ　３年間をふり返って

⑴３年間の子どもの育ちから見えてきたこと

相手意識をもち、人とかかわりながら、自分の生活を見直し、行動に移していく力は、子どもたちが生活科や総合的な学習の時間に身に付けた大きな力である。

その力が各教科・特別活動、そして学校生活ばかりでなく、家庭生活の中でも見られたことは大きな成果である。本気で活動に取り組む子どもたちの姿は、本校が３年間ＥＳＤに取り組んできた成果そのものであるととらえている。「知る・行動する・継続させる」という学習のプロセスは、ＥＳＤ実践には欠かせない考え方である。

中央小学校が大切にしている学習のプロセス

＜知る＞

- 子どもの心を揺り動かす体験的な活動
- 繰り返し対象とかかわる場と時間の保障
- 見方を広げ、考えを発展させる他校との交流・専門家との交流

＜行動する＞

- 毎日の生活の中から少しずつ行動していくことの大切さ
- 保護者の意識の高まり（家庭や地域を巻き込んでの活動）
- 行政の立場からの情報や支援
- 本物体験（本気）→自分たちの活動に誇りと責任をもつ

＜継続させる＞

- 受け継がれていく活動
- 未来をつくるという意識　～生き方を考える～

また、学習の対象を「学校→地域→日本→世界」と広げ、他者とかかわり、協同的に学び合う場を工夫して設定することは、一人一人の子どもの学びの質を高めていくことにつながると考える。

しかし、ここで大切なことは、もう一度子どもたちに足元を見つめさせ、自分のいちばん身近な人とのかかわりを考えさせることである。小学校でのＥＳＤの学びが将来の基盤となるといっても過言ではない。

⑵ＥＳＤの視点に立った学習指導で重視される能力や態度を明確にする

平成２２年度１１月に発表された「学校における持続可能な発展のための教育（ＥＳＤ）に関する研究」の中間報告書では、ＥＳＤの視点に立った学習指導で重視される能力や態度が明確に示されている。ＥＳＤでは、子どもたちが身に付けた能力や態度を行動に移し、実践につなげることが重要であると考える。これをふまえ、教師は、単元の学習とＥＳＤの視点から実践を評価し、その後の子どもへの支援につなげていくことが大切である。

冬季休業中に行われたＥＳＤ実践報告会では、本校の教師からも「評価の観点を作成し、ワークシートの作成に活用する」「子どもに付いた力を観点別に評価し、次の学年に目指す子ども像を描く」などの話題が挙がった。

平成２４年度に向け、総合的な学習の時間の評価規準を再度検討し、それぞれの活動の中で子どもに付けたい力を洗い出し、学年に応じた「ＥＳＤで付けたい力」を明確にしていくことが急務である。

＜ＥＳＤ実践報告会で話題に挙がったＥＳＤで付けたい力＞
- 課題の本質にせまる態度・意欲
- 未来を予測し、解決に向けて計画を立てる力
- 情報の収集し、整理・分析する力
- 他者とかかわる力（地域・友だち・・・）
- コミュニケーション能力
- 課題解決に向けて実践していこうとする態度　　など

⑶学校としての体制づくりの継続

本校では、１年目の実践を通して、ＥＳＤについて少しでも理解を深めようと手探りで突き進んだ。２年目には、中央っ子フェスティバルを開催し、子どもの姿からその成果を実感できた。３年目は、新たな教職員構成のもと、「ＥＳＤとは何か」もう一度原点に立ち返って見つめ直す１年となった。また、この間も外部から講師を招き、ＥＳＤの認識を深めてきた。毎年の教師の異動に伴い、学校として体制をどう維持していくかは本校の課題であるが、異動によってＥＳＤの認識を外に広められると考えれば、よさとも捉えられる。

本校の前教頭が機関勤務となり、氷見ユネスコ協会や富山市の他のユネスコ・スクールに中央小学校の取り組みを紹介したり、学校訪問研修の際にＥＳＤに関する講話を行ったりするなどして、ＥＳＤの認識を多くの学校に広める役割を果たしている。また、様々な問題に教師自身が関心をもち、学ぶ姿勢をもつこと、他地域の取り組みを知ることも大切である。本校では今後も様々な課題と直面しながら、ＥＳＤを実践する体制を維持していきたい。

⑷県内外のユネスコ・スクールとの情報交換の進展

富山でもユネスコ・スクールが増えつつある。本校が北陸初のユネスコ・スクールである経験と誇りをもちＥＳＤの推進に努め、他校との連携を図ることは大切である。学校から地域へ、そして県外、世界へと交流の輪を広める仕組みづくりを構築し、ユネスコ・スクールのネットワークを活用して、教師ばかりでなく子どもたちも様々な学校と交流しながら情報を共有していきたい。教室ではできない学び、子どもがどきどきする体験を重ねながら、本校では今後も未来をつくる子どもたちを育てていきたい。

おわりに

学校、教師、子ども、保護者、地域が共通の意識をもち、これらがうまくリンクしあったときにＥＳＤの目指す持続発展可能な社会の実現へと向かう。中央小学校がＥＳＤの推進に向け、今日まで歩んできた３年間を振り返ると、試行錯誤の連続であった。

しかし、ＥＳＤを実践していくにつれ、子どもたちや子どもを取り巻く大人の姿に少しずつ変化が見られてきた。その変化こそがＥＳＤの成果であると強く思う。子どもたちは、体験を通して自然の豊かさや生き物の命を大切にしようとする心をもつ。体験は子どもの人生に大きな意味をもち、多くの体験を通して、自然の豊かさや生き物の命を大切にしようとする心が育つことは、「人間としてみんなで生きていこう」、「みんな幸せになろう」というＥＳＤの視点そのものである。

ＥＳＤの取り組みの第一歩は、地域を知ることである。中央小学校区は、古くから歴史と伝統を重んじる風土が根付いており、地域に住んでいる人々は郷土愛に満ちている。ＥＳＤは、地域のよき伝統や地域の人々をどうつなぐかがポイントであると言われている。このような人と人とのつながりを実感できる心が育つことはとてもすばらしいことであり、相手の立場に立って考えることができる心は、世界にはいろいろな人がいることを理解し、認め合うための素地となる。

「未来をつくる学び」をする子どもたちを育てるという意識のもと、本校では、今後もＥＳＤの推進に全力で取り組んでいきたいと考えている。

（文責　富山市立中央小学校　ＥＳＤ総括　堀井　良徳）

スライド資料

持続可能な社会づくりのための教育を目指して

－ 富山市立中央小学校における3年間のESDの取り組みを通して －

富山市立中央小学校の紹介

富山市立中央小学校の紹介
風力発電
太陽光発電
太陽熱温水器
エコスクール（環境に配慮した施設）
氷蓄熱式の空調
深夜電力利用
クールチューブによる
外気取り入れ口

富山市立中央小学校の校区
文化
自然
人

ESD実践に向けた取り組みのプロセス

＜第一段階＞（平成20年4月～9月）
学校の幹部を中心としたユネスコ・スクールへの申請

＜第二段階＞（平成20年9月～12月）
教師全員によるESDの認識の共有

＜第三段階＞（平成20年12月～平成21年3月）
ESDの観点を踏まえた学習指導計画の作成

＜第四段階＞（平成21年4月～）
新学習指導計画の策定、実践と見直し

ESD実践に向けた取り組みのプロセス

学校の幹部（校長・教頭）を中心としたユネスコ・スクールへの申請（平成20年4月～9月）

ユネスコ・スクール加盟に向けて

H20.	8.12	ユネスコ・スクール申請作業開始
	9.20	申請書作成にあたり富山市教育委員会に協力を依頼
	9.26	富山県教育委員会に推薦状を提出
	10.1	富山県教育委員会に申請書を提出
	12.11	日本ユネスコ国内委員会申請
H21.	2.19	UNESCO承認
	4.9	日本ユネスコ国内委員会から通知

ESD実践に向けた取り組みのプロセス

教師全員によるESD認識の共有
（平成20年9月～12月）

＜研修会を通して分かったこと＞

・ESDは、新しい教育でも特別な教育でもない。
・日々の教育活動の中にはESDの要素がたくさんある。

教師全員がここに気づくことが大切

ESD実践に向けた取り組みのプロセス
－ ESDカレンダー作成のプロセス －

ESDの視点を踏まえた学習指導計画の作成
（平成20年12月～平成21年3月）

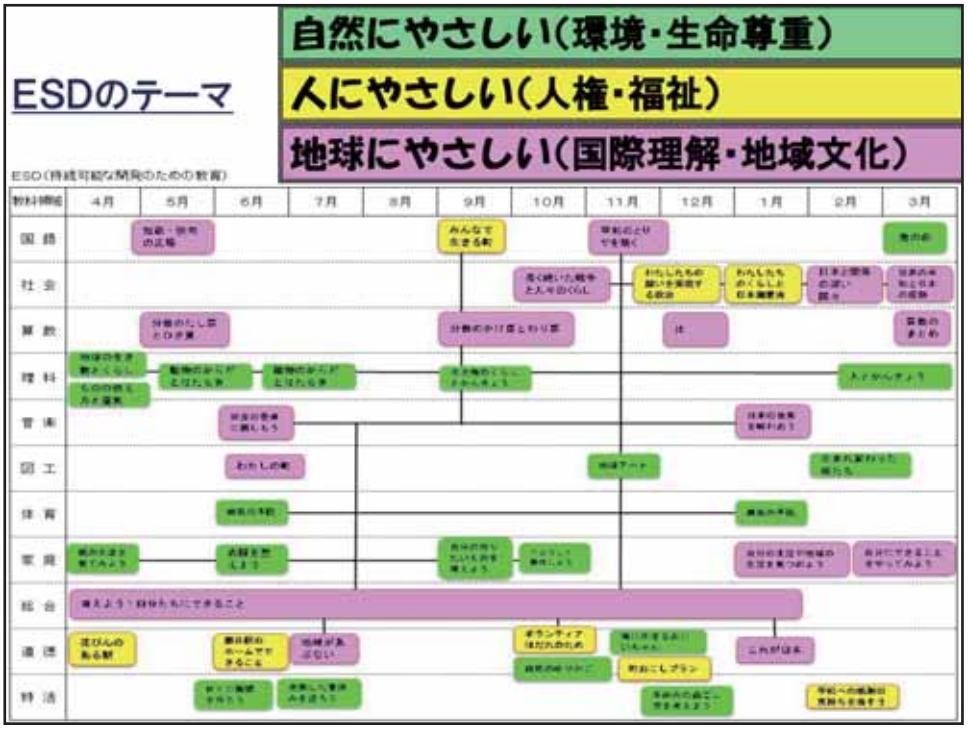
ESDカレンダー中央バージョンのテーマ

自然にやさしい（環境・生命尊重）
人にやさしい（人権・福祉）
地球にやさしい（国際理解・地域文化）

↓

各教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間の中からESDの視点をpick up

ESDを意識する前からあったカリキュラム
このカリキュラムをもとにESDカレンダー作成


ESDのテーマ
自然にやさしい（環境・生命尊重）
人にやさしい（人権・福祉）
地球にやさしい（国際理解・地域文化）
ESD（持続可能な開発のための教育）
教科領域
4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
12月
1月
2月
3月
国語
社会
算数
理科
音楽
図工
体育
家庭
総合
道徳
特活

ESD実践に向けた取り組みのプロセス

－ ESDカレンダーを活用した実践に向けて －

年間指導計画の更なる見直しと新計画の試行的な実践（平成21年4月～7月）

学校全体としての体制、ESDカレンダー完成

↓

平成21年4月　新担任による新年度スタート

新担任による年間指導計画とESDカレンダーの見直し

ESD実践に向けた取り組みのプロセス

－ ESD実践に向けて学校全体としての取り組みの体制づくり －

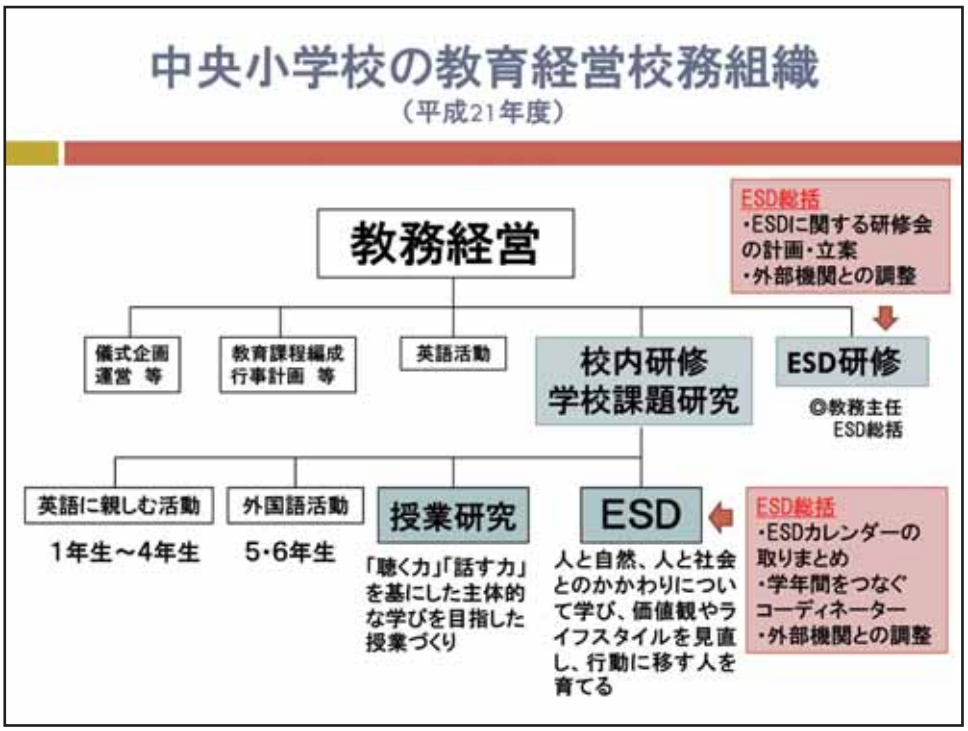
教育計画の中での位置づけ

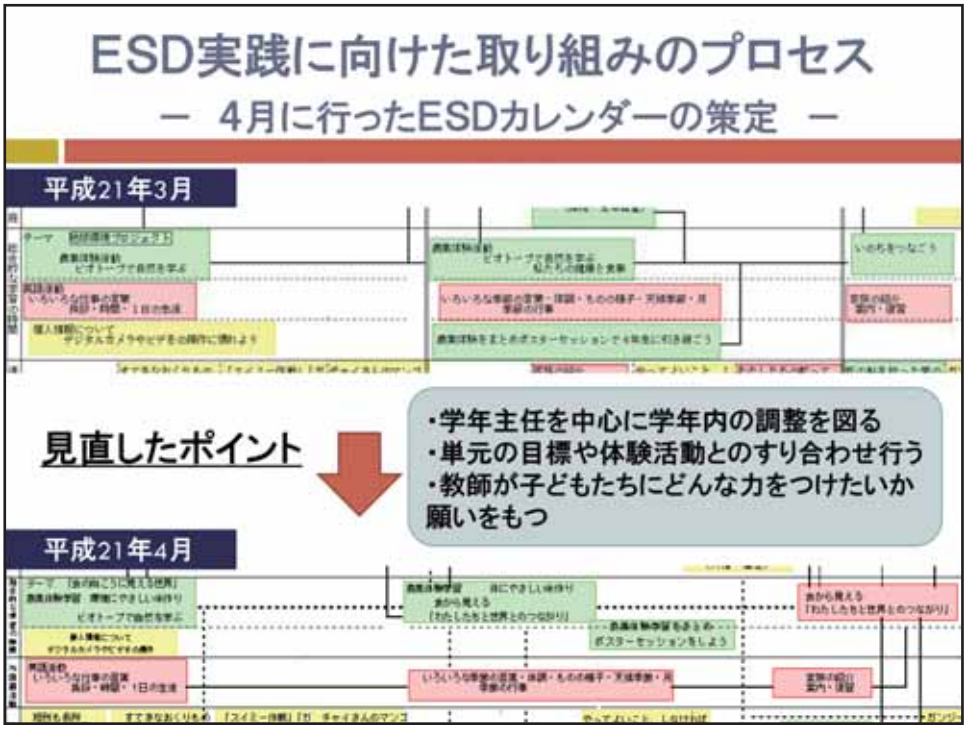
・地域や自然、人とのかかわりや豊かな体験を重視
・学校教育目標を核にしたESD全体計画の作成

学年主任を中心とした学年内の調整
ESD総括の設置

ESD総括の役割

・ESDに関する校内研修の開催
・ESDカレンダー見直し作業、取りまとめ
・各学年間をつなぐコーディネーター
・地域や他の連携機関との連絡調整


中央小学校の教育経営校務組織
（平成21年度）
教務経営
ESD総括
・ESDに関する研修会の計画・立案
・外部機関との調整
儀式企画
運営　等
教育課程編成
行事計画　等
英語活動
校内研修
学校課題研究
ESD研修
◎教務主任
ESD総括
英語に親しむ活動
1年生～4年生
外国語活動
5・6年生
授業研究
「聴く力」「話す力」を基にした主体的な学びを目指した授業づくり
ESD
人と自然、人と社会とのかかわりについて学び、価値観やライフスタイルを見直し、行動に移す人を育てる
ESD総括
・ESDカレンダーの取りまとめ
・学年間をつなぐコーディネーター
・外部機関との調整


ESD実践に向けた取り組みのプロセス
― 4月に行ったESDカレンダーの策定 ―
平成21年3月
見直したポイント
・学年主任を中心に学年内の調整を図る
・単元の目標や体験活動とのすり合わせ行う
・教師が子どもたちにどんな力をつけたいか願いをもつ
平成21年4月

ESD実践に向けた取り組みのプロセス

ポイント！

- ESDは、新しい教育でも特別な教育でもない。日々の教育活動の中にはESDの要素がたくさんある。まずは、教師全員がここに気づくことが大切である。
- ESDカレンダー作成は、現在使用している年間指導計画をベースに すればゼロからの出発ではない。
- ESDカレンダーを作る過程で、教師の頭の中が整理される。
- 教育計画作成等、ESDを推進していく上での体制づくりはコアグループ（校長・教頭・教務主任等）の大切な役割である。

ESDの視点から行われた学習指導計画の見直しの内容
ー 夏季休業中の更なる見直し ー

ESDカレンダーを用いて4月に作成した新学習指導計画を更に見直していったプロセス

ESD総括を中心に

1学期の実践を通しての改善を図る

見直しの観点

①教科の関連から
②外部（専門）機関との連携から
③2学期の取り組みの修正予定と次年度への提言

ESDの視点から行われた学習指導計画の見直しの内容
ー　夏季休業中の更なる見直しー

うまくいった点

・複数方向からのアプローチによる子どもの学びの深まり
・外部機関との連携による効果

見えてきた改善点

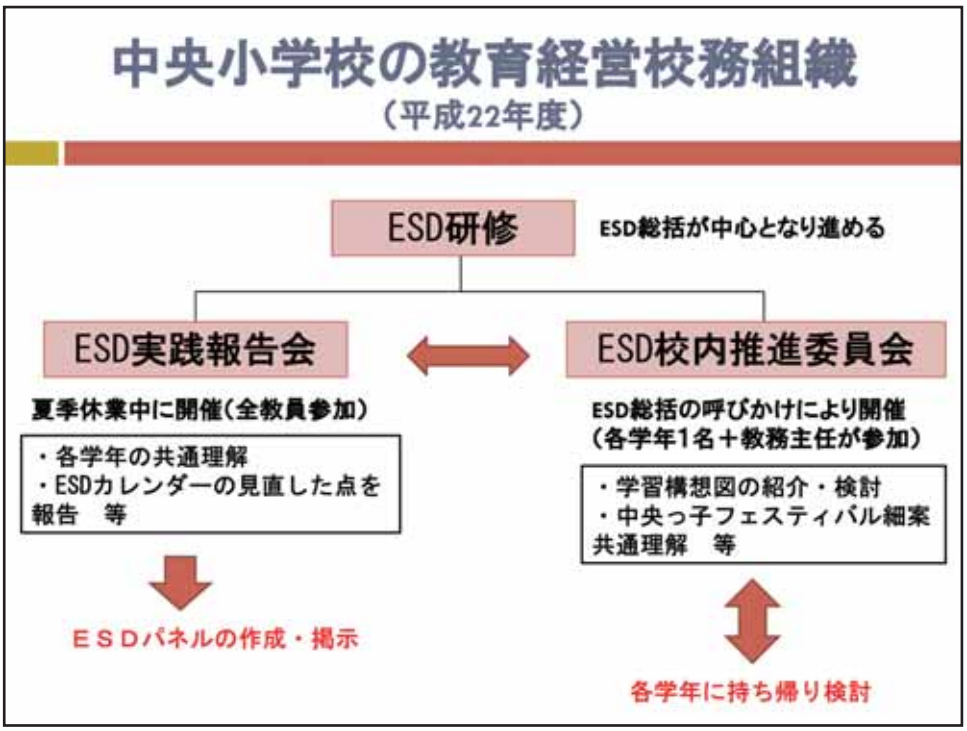
・教科との関連が図れているところと図れていないところがある　→　単元の入れ替え・付け加え
・ESDカレンダーの中にESDを展開していくうえで必要なスキルが示されていない　→　教科の内容を確認

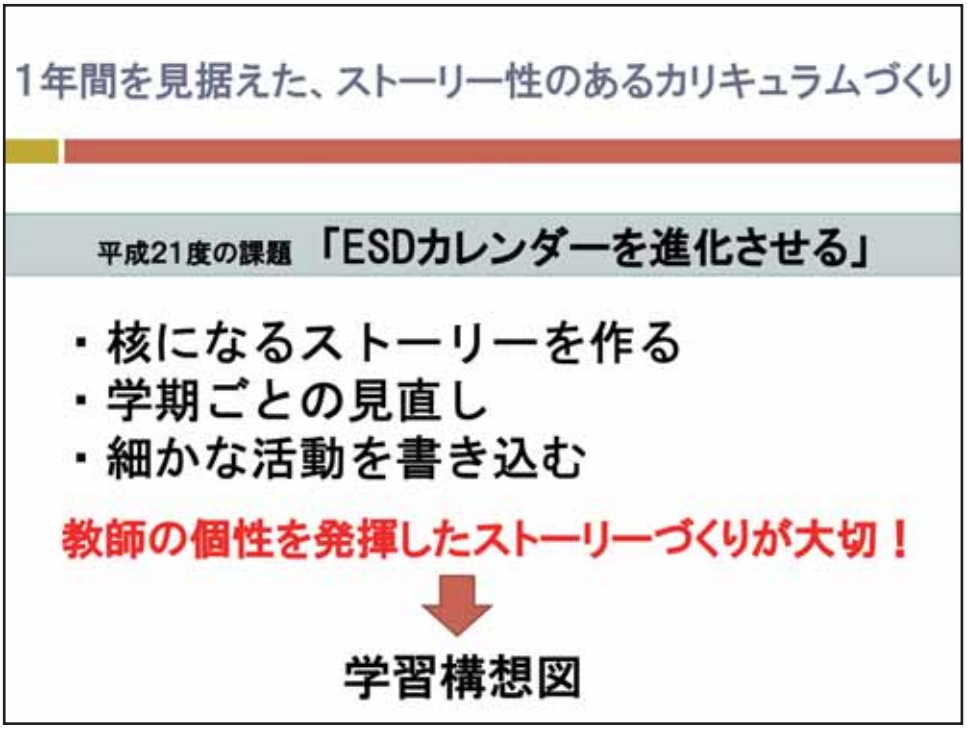
ESDの視点から行われた学習指導計画の見直しの内容

様々な関係者との連携・協力

・　外部関係機関と協力・連携を図ることにより、子どもたちは、専門的な知識を得ることができ、個々の考えが深まる効果がある。
・　教師は、子どもに考えてほしいこと、学んでほしいことを関係者に伝える。
・　子どもたちにどのような視点で話をしてもらうか教師との打ち合わせを綿密に行うことが大切である。

あくまでも現場の教師が学習を展開する上で、
イニシアチブを発揮することを忘れてはならない


中央小学校の教育経営校務組織
（平成22年度）
ESD研修
ESD総括が中心となり進める
ESD実践報告会
ESD校内推進委員会
夏季休業中に開催（全教員参加）
・各学年の共通理解
・ESDカレンダーの見直した点を報告　等
ESD総括の呼びかけにより開催
（各学年1名＋教務主任が参加）
・学習構想図の紹介・検討
・中央っ子フェスティバル細案共通理解　等
ＥＳＤパネルの作成・掲示
各学年に持ち帰り検討


1年間を見据えた、ストーリー性のあるカリキュラムづくり
平成21度の課題　「ESDカレンダーを進化させる」
・核になるストーリーを作る
・学期ごとの見直し
・細かな活動を書き込む
教師の個性を発揮したストーリーづくりが大切！
学習構想図

1年間を見据えた、ストーリー性のあるカリキュラムづくり

学習構想図のよさ

子どもの思考の筋道を丁寧に表したことで、教師自信の思い描いたストーリーが一目で伝わってくる

＜教師が学習構想図の中に盛り込んだ手立て＞
- 家庭との連携を密にする
- 人材を広く繰り返し活用する
- 図書館司書と連携する
- メディアの活用する

教師全員による共通理解の場の構築

平成21年度の課題 「学年間のつながりを構築する手段や方法の形成」

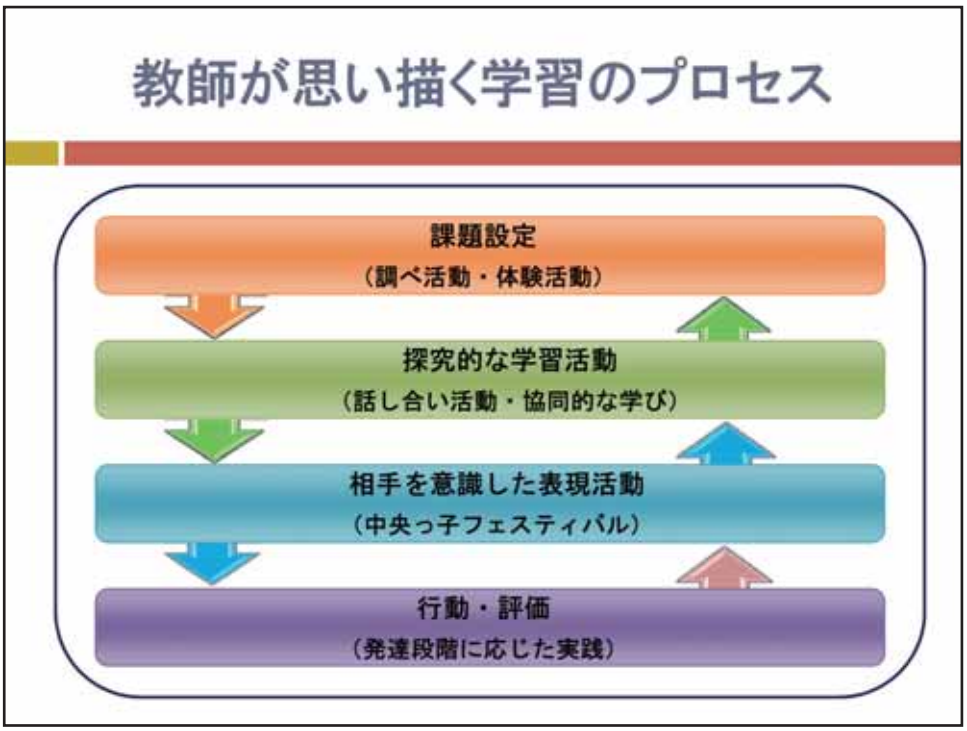
「ＥＳＤ実践報告会」や「ＥＳＤ校内推進委員会」などの研修会の企画・運営をＥＳＤ総括が行い、学年間をつなぐ体制づくりを進める

↓

教師の間の意識のつながり

↓

中央っ子フェスティバル


教師が思い描く学習のプロセス
課題設定
（調べ活動・体験活動）
探究的な学習活動
（話し合い活動・協同的な学び）
相手を意識した表現活動
（中央っ子フェスティバル）
行動・評価
（発達段階に応じた実践）

中央小学校ESDテーマ
各教科
自然にやさしい
学校行事
道徳
生活科・総合的な学習の時間を中心とした取り組み
１学年　なかよし　いっぱい！
２学年　ともに生きる
３学年　発見！発信！中央小探検隊　世界わくわく大発見
４学年　レッツゴー！いたち川調査隊
５学年　食の向こうに見える世界
６学年　Ａｃｔｉｏｎｓ，ｎｏｔ　Ｗｏｒｄｓ
児童会活動
学級活動
人にやさしい
地球にやさしい

ESDの実践1/6
1年　なかよしいっぱい
学校たんけん（春）
公園たんけん（秋）
人
地域
自然
校区の幼稚園を招待
あさがおのお世話

ESDの実践2/6
2年　ともに生きる
野菜を育てよう
生き物
町たんけん
地域
ファミリーパークでの体験
わくわく田んぼ
環境
人

ESDの実践3/6
3年　発見！発信！中央小たんけんたい
校区たんけん
人
地域

ESDの実践4/6
4年　レッツゴー！いたち川調査隊
人
環境フェアに参加・発信
いたち川調査
環境チャレンジ10
環境
自然
地球

ESDの実践5/6
5年　食の向こうに見える世界
自然
人
手作りセントラル水田
有機栽培農家での体験
環境
地球

ESDの実践6/6
6年　Actions、not　Words　～ 自分にできることから始めよう ～
書き損じハガキ回収
ペットボトルキャップ回収
募金活動
国際理解
地球
中央っ子フェスティバル
人

中央小学校におけるESD実践の成果

組織としての学校全体としての取り組み

○ 一部の教師のイニシアチブから、教師全員のESD理解へ

○ 新たなESD教育を始めるのではなく、今あるカリキュラムを見直す

↓

具体的なカリキュラムづくりとそれを実施する体制づくりが鍵

中央小学校におけるESD実践の成果

学校だよりやPTAの広報誌に学校の取り組みを掲載

保護者の
意識の高まり

中央小学校におけるESD実践の成果

学校ホームページでの情報発信
http://www.tym.ed.jp/sc105/

中央小学校におけるESD実践の成果

地域は豊かな体験の場

3年生
スーパーマーケットを見学し、店員さんに質問する
→ 解決できた喜び

4年生
グランドプラザで行われた環境フェアに参加し、取り組みを発表する
→ 発信した自信

地域資源の利用
- 古くからの老舗（売薬、飴や 等）
- 商店街（中央通り、総曲輪グランドプラザ）
- お寺、神社
- スーパーマーケット

子どもを取り巻くすべての大人が同じESDの価値観に立ってESDを推進していくことが大切

中央小学校におけるESD実践の成果

考える力

他を思いやる心

コミュニケーション能力

伝える力

自信

実行する力

子どものＥＳＤの意識の高まり

様々な学習や生活の中へ返ってく姿

人がかわる、未来をかえる学び合い　それがESD

この冊子は再生紙を使用しています。